

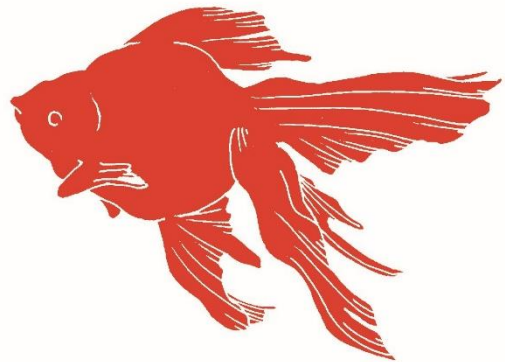
第七回公演

西瓜糖

ご馳走

作 秋之桜子

演出 加納幸和



■スタッフ■

作

秋之桜子

演出

加納幸和

美術

石井強司

照明

阿部康子

音響

今西工

衣裳

大野典子

衣裳協力

上岡紘子

舞台監督

井関景太

演出助手

高橋邦智

当日運営

日置浩輔

制作協力

野元綾希子

宣伝デザイン

難波利幸／木村彩菜

宣伝写真

オザワミカ

宣伝ヘアメイク

サト・ノリユキ

舞台写真

畑中嘉代子

舞台録画

宮内勝

HPデザイン

Kazz movie

企画制作

西瓜糖

BUG STUDIO LLC

■配役■

峰岸 慶次 小説家・五十代前半
峰岸 稜子 その妻・四十代後半

山路和弘
奥山美代子

辺見 尚介 医者・五十代前半

井上和彦

辺見 彩 その妻・四十代後半

山像かおり

辺見 尚人 その息子・二十四歳

山田悠介

咲織・ベーカー 夫を戦争で失った女・三十代後半
マリア(桑田松子) キャバレーの踊り子・二十四歳

田野聖子
小園茉奈

林田 郁夫 尚人の病院の医者・三十代後半

宮本崇弘

門倉 丈一郎 出版社社長の息子・二十代前半

武市佳久

望月 タミ お手伝い兼看護婦見習い・二十代前半

大出美結・宮嶋野乃花

永野 信幸 警察官・二十代前半

黒瀬亘・舟山利也

ウェイトレス

大出美結・宮嶋野乃花

運転手

黒瀬亘・舟山利也

エッシャーのだまし絵のような空間——点在した場所が階段、坂道などで繋がっている

A・文机が置かれている場所（※土足不可）

B・丸テーブルと椅子が置かれている場所（※土足可ORスリッパ）

C・高い場所（海の近くの突堤など※土足可）

D・その他

AとBと交わる所に金魚鉢が置かれている

※ラスト近くまで生活音・海の音などは入らない

※場面が混ざるところは●で表記しておく

——音楽

1970年 3月初旬・大阪万博間近 同じ時刻・違う場所

ある日の一日——やや曇り・時々雨

OA・東京の女の部屋・1

文机で原稿を書いている男（峰岸慶次）机の上には鉛筆立て、床には原稿が散乱している
その近くに布団が敷いてあり寝転がっている若い女（マリア）

OB・東京の作家の家のリビング・2

着物を着た女（峰岸稜子）が鉛筆を削っている

削り具合をみながらシャリシャリと音をさせ、とても穏やかな様子で次々と削っていく

白衣の男（辺見尚介）が埠頭に座り、釣りをしていると、パラソルをさし首に包帯を巻いた女（咲織・ベーカー）が出て来る。彼女はいつも「世界の国からこんにちは」を歌っている（最終P参照）
咲織は辺見の姿を見つけると階段（もしくは坂）を上がり近づく

咲織

先生

辺見 やあ、おはよう、咲織さん

咲織 何してらっしゃるの？

辺見 釣りですよ

咲織 釣れますか？

辺見 いや、それがまったく

咲織 あらあら

辺見 あらあら、です

咲織がとても幸せそうに笑うので、辺見もつられて笑う

咲織 （海を見て）暖かいのかしら？

辺見 まだ冷たいでしょう。海の温度は地上より一ヶ月ほど遅れますから

咲織 落ちたら死ぬ？

辺見 死ぬかもしれません

咲織 先生は反対？

辺見
咲織

大反対です
そう……残念ねえ

咲織はパラソルを置き、手を伸ばして海に触ろうとする

辺見
咲織
辺見
咲織
辺見

あぶない
冷たいかどうか、知りたいの
ホントに冷たいんです
さわらなきゃわからないでしょ？
落ちてしまいますよ

咲織が前のめりになり、辺見は慌てて咲織の身体を押える

咲織
辺見
咲織
辺見
咲織

(笑い)くすぶったい
動いちゃだめだ
リチャード？
え？

I've been waiting for you. You're finally here for me. Let me go with you this time.
(待っていたわ。迎えに来て下さったのね。一緒に死にまじょうね、今度は一緒に)

咲織に身体を引っ張られ、辺見は落ちそうになり、声をあげる最中、警官(永野信之)が出てくる

永野 (二人の様子を見て)「こらいかんっ！」

永野は階段(もしくは坂)を駆け上がると、二人を助ける

永野 ダメですよ、咲織さん

咲織 だって、リチャードが迎えに来たのよ

永野 この人はリチャードさんではありません

咲織 (辺見を見て)「あら先生、こんにちは
こんにちは

咲織は parasol を持つとクルクルと回し「世界の国からこんにちは」を鼻歌で歌いだす

辺見 ……ありがとう、助かったよ

永野 油断大敵ですよ。先生がやられちゃ話になりません

辺見 ホントだね(釣り竿を元の位置に戻し)あの人、力、強いんだな……いや、驚いた(笑う)

永野 笑いごとじゃないですよ。ああやって突堤にやってきちゃ、誰かと死のうとするんだから……
家の中に閉じ込めておくことは出来んのかな

辺見 彼女の母上もお歳だからね、一日中、見張ってもいられまい

永野 そろそろ、本気で精神の病院に入れることを……

辺見 いや、あそこに入れると余計、悪くなる

永野 かし

辺見 君も、リチャードさんに英語を習っていた口だろ？

永野 ……まあ、ええ

辺見 と、言うことは、咲織さんの手作りクッキーが目当てだった口でもある

永野 ……（その味を思い出す）

辺見 うまかったろ、あれ

永野 はい。甘くて甘くて、これが本場アメリカの味かって夢中になりました

辺見 尚人も、よくおじゃましていたよ

永野 そうですか

辺見 世話になったんだ。他に悪いコトをするわけでもなし、今まで通り見守ってやろう（咲織を見て）こちら側が気を付けていればいいのだから

永野 油断せずに、ですよ

辺見 はい

咲織 ごきげんよう

辺見と永野（ややびっくりにして、しられてしまい）ごきげんよう

咲織 ニッコリと笑顔を向け、去っていく——男二人はその姿を見送る

永野 亡くなられて……半年ですね

辺見 そうなるね

永野 なんだか妙な気がしました……リチャードさんの訃報を聞いたときは

辺見 妙な気？

永野 日本に勝利した国の兵士がこの国に作った基地から飛び立って戦死するとはなんだか……妙な
じゃありませんか？

辺見 戦後生まれか君は
永野 ええ（釣り竿が動いているのに気づき）お、先生つ、引いてますよ！
辺見 お！

二人は「ゆっくり」「ごうか」「ダメですそれじゃ」と大騒ぎするが逃げられてしまう

辺見 あくく、やられた

永野 あれはヒラメですね

辺見 ヒラメ?!

永野 この辺りで珍しい。迷い込んだのかな

辺見 ヒラメかあ……うわあ……惜しいことをした……

永野 沖に出れば釣れなくもないですよ。今度、是非

辺見 ああ

永野 （敬礼して）では

永野、去って行く

辺見 ……ヒラメ、こいつ

辺見はまた釣り糸を垂らす

稜子は鉛筆を削ると茶封筒に入れ、風呂敷に包む

● 同じ部屋に着物を着た女（辺見彩）が出てきてテーブルを拭く

稜子は金魚鉢をつつく

● 彩も金魚鉢をつつく

稜子、出て行く

● 彩は金魚にエサをやる

OB・海の近くの医者の子のジグ・5

若い男（辺見尚人）が小さな壺と一冊の本を持って出て来る

尚人 母さん、梅干し、とってきたよ

彩 ありがとう

尚人 あれ？ 父さん、どこ行ったの？

彩 早起きして（釣りの）恰好をして「コシ

尚人 好きだね、ちっとも釣れやしないのに

彩 待ってるのも「釣り」なんですって……でも、一匹くらいねえ

尚人は彩がどンドン金魚に餌をやるのを見て

尚人 母さん、それ

彩 ん？

尚人 金魚。エサ、やりすぎると死んじゃうぜ

彩 ……やだ……美味しそうに食べるからつい

尚人は苦笑する。彩は金魚鉢から離れると、尚人の持ってきた本に気付く

彩 あら、その本……どこから

尚人 納戸の本棚で見つけたんだ

尚人は本を彩に見せ、彩はその本を手取る

尚人 こないだ友達からこの作家の「戦火の華」っていうの勧められて読んでみたら面白くてさ。な

んか、うちにもあったなって気がして探したら……あった

彩 (本のホコリを払う)

尚人 母さんの？

彩 お父さんのでしょ

尚人が本に手をかける、彩は渡すまいと本を押え、ちょっとした引っ張り合いになる

尚人 (彩がふざけてると思い) なにしてんの、もう、母さん

彩 (ふざけた様子で手を離し) へへへ

尚人 (題名を読んで) 「細き君の手」……か

彩 あなたが読むには少女趣味よ

尚人 (本をめくりながら) ふん

彩 ……ねえ、先にお父さん、呼んできて頂戴。朝ごはんよって

尚人 え？ まだいいだろ？

彩 雨が降りそうだから

尚人 雨？(外を見て)……降るかな？

彩 いいから早く

尚人 はいはい

尚人、本を持ち、去る。彩は「あ、それ……(持っていくの?)」「と小さく声をかけるが、尚人には聞こえず、出ていく。彩「ま、いいか……」「と小さくつぶやく

御用聞き(声) 奥さん、おはようございます。野菜、持ってまいりました

彩 ……

御用聞き(声) 奥さん??

彩は「はい」と言いながら、去る

OA・東京の女の部屋・6

マリアは起き上がり金魚鉢に近づくとツンツンと突く。金魚たちが寄ってくる

マリア お腹、空いたの？（エサをやり始める）ほらお食べ、ごちそうだよ

金魚と同じように口をパクパクするマリアを見て、峰岸は何やら書き込む

マリア あゝあ、アタイもお腹空いちゃったなあ

峰岸 ……

マリア 鰻食べたいよう、ねえ

●咲織がパラソルを回しながら、出て来て「世界の国からこんにちは」を歌う

マリア センセイ、テレビ買ってよう。アキちゃんなんかさ、カラーテレビ買ってもらったんだよ

峰岸 ……

マリア ねえってば

峰岸 （懐中時計を見る）

マリア 奥さん、もうすぐ？

峰岸 ああ、朝に電報を打ったからね

マリア お宅どこだっけ

峰岸 荻窪だ

マリア じゃあ案内近いね、車でくんの？

峰岸 電車さ、アしは君と違って無駄遣いはしないから

マリア （峰岸を真似て）「君と違って無駄遣いはしないから」

峰岸 ……

マリア　でもさ「奥さん」ってエライよね。アタイなら絶対ヤダな。旦那の女の家に来るなんて……（峰

岸にすり寄り）……でさあ、今日は何の日だ

峰岸　今日？

マリア　ねえ

峰岸　知らん

マリア　もう！　こないだ、教えてあげたら

峰岸　……

マリア　なんの日だあ？

峰岸　頼む、黙ってくれ。今、これ（原稿）を仕上げているんだ

峰岸、また書き出す

マリア　ふんだ

マリアは布団の上に寝っ転がる

● 尚人が出て来て、突堤への坂道を上がっていく。咲織とすれ違い、尚人は「こんにちは」と挨拶をするが、咲織はそれには答えず、歌を歌いながら去る

〇〇・海の近くの突堤・7

尚人　父さん

辺見　おう

尚人 母さんが、そろそろって
辺見 もう患者が来たか
尚人 いや、雨が降りそうだからって

二人、空を見上げる

辺見 降るか？
尚人 うーん
辺見 ……青空とは言えず、さりとて曇り空でもなく……か
尚人 ですね
辺見 まあ行くか、腹も減った

辺見、釣竿を片付けようとすると、引きがくる

辺見と尚人 おっ！
辺見 ヒラメかもしれんっ
尚人 ヒラメ？
辺見 さっき、きたんだ
尚人 そりゃすごい

二人は「お」「お」と盛り上がるが、結局、何も釣れず、また釣り竿にエサをつける辺見

尚人 あの人さん……（帰らなきゃ）
辺見 ま、あと少し

尚人 「しょうがないな」と苦笑しながら、辺見の隣に座る

辺見 お前こそ、急がなくていいのか？

尚人 今日は夜勤です

辺見 そうか

尚人 ええ

二人は釣り竿を見ている

辺見 どうだ、東京の病院は

尚人 面白いです

辺見 だろうね

尚人 ……でも、なんだかわさわさとしています

辺見 ワサワサ？

尚人 とにかく人が多くて、何もかも合理主義で

辺見 そりゃそうでなくちゃ、やれんだろ

二人は釣り竿を見ている

尚人 ……父さん

辺見 ん？

尚人 ここにも来たことある、大学の同級の山岸って覚えてます？

辺見 ああ（山岸の風貌を真似して）こういうヤツな

尚人 あいつ、また捕まっちゃったんです

辺見 まだ続けてるのか運動（闘争）

尚人 ええ。捕まる前に偶然、新宿で会ってちょっと飲んだんですけど

辺見 やってたなお前も。ヘルメットかぶって、母さんが止めるのも聞かず

尚人 （恥ずかしそうに）僕はまあ、時流にのっかっただけのエセでしたけど（ペコリと頭を下げ）

辺見 その節は迷惑をおかけしました

尚人 まあ、流行り病みみたいなもんだから

辺見 ヤツと話してて…いや、言ってることすべて正しいとは思わないけど、でもなんか羨ましか

っただんです。こいつは自分の居場所を持つてるなって…で、まあ、僕の居場所はどこだろう

っと思って

辺見 ……

尚人 僕はやっぱり、ここが性に合ってる気がします

辺見 なんだぞら

尚人 ここがいいんです

辺見は改めて尚人を見る

辺見 やめるのか、東京の病院

尚人
まあ、今すぐじゃないとしても……いずれ

辺見
……

尚人
そのあかつきには……父さんの助手で、雇って下さい

辺見
おい

尚人
本気です。呑気な方がいい、僕は

辺見
呑気？

尚人
父さんに似て、呑気なのが好きなんですよ

辺見
……ふん

尚人
血、ですかね

辺見
……

尚人
父さん

辺見
やるか？

辺見は尚人に釣り竿を渡す。尚人は釣り竿を持つが、海に投げない

尚人
もう帰らないと、いい加減、怒られますよ

辺見
そうかなあ

尚人
そうですよ

二人は釣り道具を片付け、去る

●稜子がでてくる

稜子 ごめんくださいまし

峰岸 ほら来た

「マリアは「ウヘッ」と隠れる場所を探す

峰岸 何してる

マリア だってアタイがいたらヤバイだろ

峰岸 君の部屋だろここは

マリア あ、そうか

稜子 ごめんくださいまし

峰岸 ほら

マリア あ(稜子に)は〜〜い

マリアは出て行き、稜子を連れて戻ってくる

峰岸 やあ

稜子は部屋の散らかりように入るのを躊躇するが、峰岸に促され入る

峰岸 (マリアに) 茶でも入れてきてくれ

マリア え？ あ、そうだね

マリアは稜子の「おかまいなく」と言う言葉も聞かず出て行く

峰岸 ああいう女は気がきかん

稜子 でも

峰岸 ん？

稜子 それがよろしいのでしょうか？

峰岸 この連載が終わるまでさ

稜子 これを（と、風呂敷包みを峰岸に渡す）

峰岸 うん

風呂敷の中には二つの封筒。一つの封筒には尖った鉛筆が十本ほど。もう一つの封筒にはお金

峰岸は一本一本、鉛筆の具合を見る

峰岸 流石は奥さんだ。鉛筆の先端はこうでなくっちゃ。試しにアしに削らせてみたら、ご覧、このざまだ

峰岸、無残に削られた鉛筆を稜子に見せる

稜子 まあひどい

峰岸 君が持ってきてきてくれなきゃホントに困った

峰岸は先の丸まった鉛筆を稜子に渡し、受け取ろうとした稜子の身体を引き寄せる。稜子はあらがい、はずみでエンピツが転がる。峰岸は「あくあ」と稜子から離れ、稜子は「すみません」と言いながら、鉛筆を拾う

峰岸 怒ったね

稜子 いいえ

峰岸 本気で怒ってる

稜子 ……

峰岸 本気で怒ると君、右側の頬がひきつるんだ

彩子 (右側の頬を触る)

峰岸 (笑い) さわってもわかるもんか

峰岸は「さてさて」と、金の入ったの封筒の中身確かめる

峰岸 これだけ？

稜子 このところ、高くはとってくれなくて

峰岸 金光(かねみつ)んとこか？

稜子 はい

峰岸 ちエツ、足元見られたな

稜子 そのようですわ

峰岸 流さないように頼んでおいたかい？

稜子
いいえ

峰岸
ダメだぜ、言っておかないと。あの質屋はすぐ流しちゃうんだ

稜子
……

峰岸
次の原稿料が入ったらすぐに編集に持たせるから、それで必ず出すんだよ、いいね？

稜子
わかりました

峰岸
これ、連載の初稿だ

峰岸は原稿を稜子に渡し、稜子は当たり前のように読み始める

峰岸
峰岸は落ち着かない様子で爪をカリカリと噛みだす——稜子は峰岸を見る

稜子
(見られているのに気付き) 大丈夫だ、滝沢に頼んである

峰岸
あまり過ぎると、前のように……
(制して)読んでくれ

マリアがお盆に茶碗を三つのせ、入ってくる

マリア
遅くなっちゃった。お茶ツパ切らしてたから、お隣に借りに行ったらさ。おばあちゃん、おし

峰岸
やべりが止まなくなかって(稜子を見て)あゝ、アタイには絶対、読ませないくせにっ
君は読めないだろう

マリア
読めるさ、アタイだって

マリアは原稿を覗くがやはり読めない

マリア もっとひらがなで、書いてくれない？

峰岸 ほらみる

マリア チエツ（稜子に）ね、奥さん、アタイのこと素敵に書いてある？

稜子 ……

マリア （ちよっと気取って）センセイね、アタイにいろいろやらせるんですけど、それは「創作」のためだっておっしゃるの。「創作」すればアタイはうんと素敵になるって

稜子 ……

マリア だからさ、ほんとかどうか、知りたいのワタシ

稜子 （読む）万年床の先には、その年の夏、縁日で買った金魚が古びた金魚鉢の中、あくせくと泳いでいた

峰岸 おい、何を

稜子 モデルの方には知る権利がありますわ

マリア 読んで下さるの？

峰岸 バカなことを

マリア （止めようとする峰岸をじゃまして）奥さん、ほら、読んで！

峰岸 ……離せ

マリア アタイには「知る」なんとかが、あるんだよ

稜子 （読む）女は金魚に

マリア 女ってアタイ？

稜子 （うなずく）ええ

マリア （嬉しそうに）アタイが金魚に

稜子 (読む) 女は金魚にエサをやりすぎるのが癖で

マリア えくく、癖じゃないよ、金魚がほしがるから

峰岸 君、聞きたいのなら黙れよ

稜子 (読む) 女は金魚にエサをやりすぎるのが癖で、すでに何匹も死なせているというのに、やはりその日も金魚にねだられるがまま、エサをやり続けている

マリア (小さな声で稜子に) ホントにアタイのせいじゃないんだよ

稜子 (読む) パクパクと口を開けエサをむさぼる金魚と女は、顔もそうだがとくに腹の部分がだんだんと似てきて、修一にはそれが醜いのか、おかしいのか、わからなくなっていた……

マリア やだ、アタイ、そんな？

峰岸 ああ、そんなだ

マリアは自分のお腹を見る。その隙に峰岸は逃れる。稜子は読むのをやめる

峰岸 ダメか

稜子 ……もう少し、推敲された方がいいと思いますわ

マリア ねえ、それから？

峰岸 もう終りだ

峰岸は稜子から、原稿を取り上げる

マリア え？ それっぽっちなの？

峰岸 ……

マリア あんなにウンウン言ってる、それっぽっちしか書いてないの？

峰岸 うるさい（稜子に）もういいよ、帰んなさい

稜子 はい

マリア えらく、まだいいじゃないよう

稜子は、お辞儀をし出て行き、マリア、見送りに出る

峰岸、原稿を破こうとするがやめる——マリア、帰ってくる

マリア ねえ、帰っちゃったよ。いいの？ なんか、可愛そう

峰岸はマリアにのしかかる

マリア なによう

峰岸 女はバカがいい、バカが

マリア やだそれ、アタイのこと？

峰岸、マリアの身体をまさぐる

マリア （甘えて）ねえ、センセイ、思い出した？ 今日、何の日か、思い出した？

峰岸 ……

マリア センセイったら

峰岸 黙れっ

マリアは、ドンと峰岸を突き飛ばすと、出て行くとする

峰岸 どこ行くんだよ

マリア (真似て) 黙れっ

マリアは稜子がおいていった封筒を持つ

峰岸 おい、ダメだそれは

マリア 鰻、食べて来てやる！ あたい、バカじゃないもんっ

マリアは飛び出していく。峰岸は止めようとするが、足がもつれて転んでしまう

峰岸 ……クソッ

峰岸、そのまま、ゴロンと横になる

●お手伝い兼看護婦見習いの洋装の女・望月タミ(W)が出て来る

●散らかった部屋を見回し、片付け始める

峰岸はブルブルっと身体を震わせると、便所へと向かう

●タミ イタツ(足の先を見て) 奥様、蟻が、蟻が、部屋にまた！

彩、スリッパを持って出て来る。

彩 どうこ？ どうここ

タミ この辺りに、アタシ、噛まれちゃいました

彩 あら大変、大丈夫？

タミ ええ、まあ平気です

彩 ヨードチンキつけてもらってきなさい

タミ それよりも、蟻をみつけるのが先です。それ（スリッパ）貸して下さい

タミ、真剣に床を睨みつけて探し出す。その様子が可笑しくて彩は笑う

タミ 奥様、笑いごとじゃないですよ

彩 ごめんなさい。タミちゃんがあんまり真剣で可愛いんだもの

タミ （照れて）はあ？

彩 あら、赤くなった。やっぱり、可愛い

タミ あのね奥様。真剣にお願いします。一匹みつけたら近くに巣があるってことです。また、

お砂糖やられちゃいますよ！

彩 あの時はびっくりしたわね、お砂糖のツボが真っ黒になっちゃって

タミ うわ

彩 触ったら、ソワソワソワってその黒い塊が動いて

タミ
彩 はいはい
タミ ほら、探して下さいっ

二人は、蟻をさがす——と、彩はペロリンと床を舐める

タミ ……何してるんですか？
彩 いえ、床が甘いからかしら？って
タミ 汚いですよ
彩 あ、そうか
タミ もう
彩 育ちが悪いと、こういうところに出るのよねえ
タミ (呆れて) 何、言ってるんですか
彩 ねえ、噛むのってオスカしらメスカしら
タミ 蟻にオスカメスカありますか？
彩 あら、ないの？
タミ 女王蟻っていましたっけ……あっ、いた！
彩 女王蟻？
タミ じゃなくて、蟻！ ふつうの！ たぶん！ 奥様の、ほら、足元
彩 え？ どこ？ どこよ
タミ だから、そこ……あ！
彩 なに？

タミ 奥様……ふんじやいました

彩 えええええ、やだあ(尻餅をつきとって、ねえ、とってよ

タミ うわ……つぶれてる

彩 ねえってば

タミ あの、わたし、無理です……わああ

彩 もう、頼むわよう

二人がキヤアキヤアやっていると、白衣を着た辺見が入ってくる

辺見 なに騒いでるんだ、患者さんがいるんだよ

彩 (タミと同時に) 踏んじやったの

タミ (彩と同時に) 踏んじやったんです

辺見 踏んじやった？ 何を

彩 蟻を……(足の裏を見せる)

辺見 うわ、ほんとだ、つぶれてる

彩 あなた、とって

辺見 え？ ボクが(タミに)君、とってやれよ

タミ (首をふる) 無理です、無理

辺見 僕だって無理さ

彩 あなた、お医者さんでしよう？

辺見、しぶしぶ蟻をとる。彩、こぼれいらしく、動く

辺見

ほら、じっとして

彩

うろうろ(身もだえしながら、我慢する)

辺見

とれた

彩

(ほっとして)良かった

辺見

わ、イテッ!

辺見は慌てて蟻を庭へと投げる

辺見

(手をふりながら)噛まれた

彩

まだ生きてたの?

タミ

あれだけ踏まれたのにしぶといですねえ

辺見

しぶとすぎるよ、イテテ

彩は辺見の指をチュウとすう

彩

はい、これで大丈夫

辺見

ん

栗原のおばあちゃん(声)「先生、まだ、かかりますかあ?」

辺見

(診療所に向かって)すみません、今、行きます

彩

栗原さんとこのおばあちゃん?

辺見

ああ

彩 キュウリもらったの。お礼いわなきや

辺見と彩、診療所へと去る

タミ 仲、いいんだから……あ、また、いたっ！

タミ、蟻をおいかけていく

OB・東京・尚人の勤めている病院の近くの純喫茶・10

尚人が出て来て来て椅子に座ると家から持ってきた本「細き君の手」を読む

——少しの間——白衣を着た男（医者 of 林田郁夫）が入ってくる

林田 ……良かった。いた……

尚人 林田先生？

林田は落ち着かない様子で尚人の前に座る。ウェイトレス（※タミとウェイトレスは同じ役者が演じる）が出て来て「お待たせいたしました」と言いながら、尚人の前に珈琲を置き、林田を見る

林田 何もいらん

ウェイトレス「ハア」とつぶやき、去る

● 峰岸がふらふらと部屋に帰ってきてきて布団に包まる

尚人 どうなさったんですか？

林田 (小さな声で) お前、俺がキャバレー好きだって知ってるだろ？

尚人 いや……ええと……

林田 いいんだよ、知ってて

尚人 あ、はい。知ってます

林田 (夢見るように) 俺はな、あそこで、なんていうか夢をみて……なんていうか、あそこは夢を見る場所なんだよ、俺にとっちゃあ夢の国なんだよ

尚人 はあ

林田 なのに来ちゃったんだよ、病院に！

尚人 はあ？

林田 そのキャバレーが、いや、そのキャバレーの、俺が懇意にしているマリアって女が

尚人 そうですか

林田 そうですかじゃないよ！ ああ……まったく、ドジ踏んだよ。俺としたことが、つい、勤務先

教えちゃって……マリア、可愛いからなあ……

尚人 はあ

林田 でなっ、そのマリアからさっき、電話がかかってきて病院の前にいるから出てこないかって

尚人 ……あああああ、もおおお

尚人 ……

林田 まずい、まずいよ、病院の周りうろつかれたりして、マリアの存在しられたら……お前、俺の奥さん、知ってるだろ？

尚人
いえ

林田 (舌打ちして) 婦人科の婦長の林田、アレだよ

尚人 ええ(驚いて) え? あの林田さん

林田 そうだよ

尚人 ……ずいぶん、と、歳が上で……いや、年上の……奥様ですわね

林田 怖いんだよ。あいつ、マジ怖いんだよ

尚人 あゝ(怖いだろいなあと想像する)

林田 (大げさに) マリアのこと知られたら……血の雨がふる……

尚人 (真面目に) 降りますわね

林田 でな、どうしたらいいんだろって考えてたら、閃いたんだよ。お前のことが

尚人 ……は?

林田 でっ! 夜勤の前はここにいての聞いて裏口からこっそりとな……(手を合わせ)頼むっ。

マリアに伝えてくれ。今日は仕事で会えないって。で、病院には二度と来るなって。で、

とにかく、お店で、レインボー(店の名前)で、会いましょうって

尚人 ……はあ

林田 他に頼る人がいないんだよ。結婚してるのには頼めないし、お前なら、ほら、独り身だから、

被害がないだろう? いや、むしろ男冥利だ!(またまた、手を合わせ)頼む! 今度、メシ、

おごるから

尚人 ……あの、まあ……いいですよ

林田 (喜んで) ありがとう! 恩に着る。マリア、病院の前にいるから、よろしくな

林田、去ろうとする

尚人 ああ

林田 なんだよ？

尚人 僕はそのマリアって人の顔知らないんですけど

林田 見たらわかる、その手の女だ(小さな声で)いい身体してるぜ

林田は逃げるように去る

尚人 ……まったく

尚人は本を机の上に置き、出て行く

●みるからに仕立ての良いスーツを着こなした若い編集者(門倉丈一郎)が入ってくる

OA・東京の女の部屋・11

峰岸 ……誰だ君

門倉 陽明新聞出版の者です

峰岸 滝沢は

門倉 他の先生の担当に

峰岸 なに？

門倉 先生の担当は私になりました

峰岸 僕になんの相談もなくか

門倉 すみません

峰岸 (さきほどまで書いていた原稿を投げ) 今はそれしかない、もってけ
門倉 失礼します

門倉、当たり前のように読み始める

峰岸 お前が読むのか？

門倉 はい、滝沢さんから、まず読むようにと

峰岸はまた、爪をカリカリとやる

OB・東京・尚人の勤めている病院の近くの純喫茶・12

マリアを連れ、尚人が入ってくる。マリアは店の雰囲気が好きではないらしく顔をしかめる
尚人は本が置いてある席にマリアを勧める。彼はこの手の女を相手にしたことがないのでやや緊張している。マリアは椅子にドカッと座る。ウエイトレスが水を持って出て来る

ウエイトレス いらっしゃいませ……ご注文は

マリア ビール

ウエイトレス ビールはございません

マリア じゃ何があるの？ 他のアルコール

ウエイトレス アルコールはございません

マリア　じゃあそれは？ ソーダにクリームがのってるやつ
ウエイトレス　クリームソーダでございますね。かしこまりました

ウエイトレス、去る

マリア　……チエ、きどつてら（尚人を睨み）で、あんだ、誰

尚人　僕は……

マリア　アタイはあんだのこと知らないんだからね、ちゃんと名乗ってよ

尚人　辺見……です

マリア　名刺、持ってる？

尚人　……え……

マリア　最近は嘘つきが多いから、怪しいヤツには名刺もらうことにしてんの

尚人はしぶしぶ名刺を出し、マリアは鑑定するかのように見る

マリア　ふくん、ホントにお医者さんか

尚人　ええ

マリア　……茅ヶ崎？ あんだ、ずいぶん遠くに住んでんだね

尚人　……まあ、ええ

マリア　けどさ、林田センセイは仕事で来られないって言うのに、なんであんだはここにいられるのさ

尚人　今日は夜勤だから、夕方からの出勤で

マリア　はああ？？　医者がキャバレーみたいな出勤時間なんてあり得ない！

尚人 あのこと……(まわりを気にする)

マリア あんた、やっぱり怪しいっ！ アタイ、林田さんに会う！

尚人は出て行くこととするマリアの手を掴む。ウエイトレスがクリームソーダを持ってやってくる
が二人の様子に立ちすくむ

マリア 痛いっ、なにすんだよっ！ はなせっ！

尚人 困るんです、病院に行かれます

マリア なんでだよっ！

尚人 林田先生が困るんです

マリア だから、なんで？

尚人 あの人は結婚していて、奥さんも同じ病院で働いていて、それはそれは恐い方なんです。ばれたら血の雨がふるんです。だから(ウエイトレスに)それ、ここに置いて下さい

ウエイトレスは恐る恐るクリームソーダを置くと逃げるように去る

尚人 ね、君、落ち着いて、これでも飲んで

マリアは尚人の手をふりほどくとドカッと椅子に座り、クリームソーダを音を立てて一気に飲む

マリア そういうことか……アタイみたいな女が来て、林田さんは、迷惑ってことか

マリア、急に泣き出す

尚人 ……あ、あの……

マリア アタイ、今日、誕生日なんだよ

尚人 え……

マリア 誰にも祝ってもらえないのが淋しくってさ、誰かに祝ってほしくてさ、だから、いつも鼻屑にしてくれる林田さんならって……なのに、ヒドイよ、林田さんまで、アタイのこと邪険にして……アタイ、誰にも祝ってもらえない……

マリアは泣きやまず、尚人はどうしていいか困り、思わず読んでいた本を差し出す

尚人 あのこれ、誕生日のプレゼント……

マリア (泣き顔のまま尚人を見て) ……は？

尚人 峰岸慶次、好きですか？

マリアは驚き、泣き止む

マリア ……好きだよ

尚人 じゃあ、どうぞ

マリアは差し出された本を見る

尚人 「細き君の手」……読んだことありますか？

マリア (首を振る)

尚人 良かった

マリア、本を手にとる

尚人 (時計をみて) そろそろ行かないと……仕事の時間なので

マリアはじっと本を見ている。尚人は、何か声をかけようとするが出来ず、去る

マリア ……なんだ……結局、センセイに、戻っちゃった

マリアが出て行くこうとするとウエイトレスがやってくる

ウエイトレス お勘定をお願いいたします

マリア え？

ウエイトレス 珈琲とクリームソーダで300円になります

マリア チェッ、あの野郎……(茶封筒から金を出し) はい

ウエイトレス ありがとうございます

マリアはむらにウエイトレスにお札を渡す

ウエイトレス え？

マリア (小さな声で) アタイ気分良くなったからさ、あんたにチップ
ウエイトレス(小さな声で) ありがとうございます

マリアは本を抱きしめ、走り去る。ウエイトレスは辺りを見回し、そそくさとお札をエプロンの
ポケットにしまうと、珈琲カップ、クリームソーダのグラスを片付けて去る

OA・東京の女の部屋・13

門倉 (読み終え) ククク

峰岸 何がおかしい

門倉 先生、これは少女趣味です。これじゃあまるで女学生が書いたような……

峰岸 それならそれでいいじゃないか

門倉 そりゃ太宰さんの「女生徒」くらいならばね。これはただ稚拙ですから(クククと笑う)
君、失礼だぞ

門倉 ああ(名刺を出し) 申し遅れました。私、門倉ともうします

峰岸 門倉……

門倉 ハイ。単純に言う社長の子息です。今年、大学を卒業しまして、今は編集見習いをさせても
らっています

峰岸 (門倉の名刺をじっと見ている)

門倉 先生の大ファンなので滝沢にかわってもらったんです担当

峰岸 ……

門倉

先生の、芥川を獲った「戦火の華」あれは素晴らしかった。戦争を書いたものは多いけれど、あれは戦争という傘の下に隠れた人の心の恥部を書いた傑作です（わざと大袈裟に）空襲の最中、心底惚れていた女給を助けられなかった薬中作家……あれってモデルは先生でしょう？（クククと笑って）女一人もかつげなくて、結局見捨てて、泣きながら一人で逃げる下り……命からがらみたいな？ まゝあ、情けないったら。人間が陳腐で実にいい！

峰岸

……

門倉

私はね、先生にあれを超えるものを書いてもらいたいです。このサイケな時代にもググッとくる「ニュー・ミネギシ」を、生み出したいんですよ

峰岸

……ニューみねぎし？

門倉

（宣伝文句のように）もっともっと、過激に！ もっともっと、刺激を！ ニュージエネレーション、ニンティーンセブンティーン（※1970年）（ポーズをつけて）ピース！

峰岸

（意味が分からず）……何を言ってるんだ君は

門倉

（峰岸の答えを聞かず）先生、長編をやりませんか

峰岸

え？

門倉

長編ですよ、長編！「戦火の華」以来、先生は短編ばかりだもの。やりましょうよ、長編！

門倉は紙袋からシヨ二黒と薬（睡眠薬の錠剤・ゼドリン）を出す

門倉

これ、滝沢さんから頼まれていたゼドリンと……

峰岸

（奪うように薬を奪い）助かるよ

峰岸は薬のみ、門倉は白けた様子でそれを見ている

門倉 あと、これは僕からプレゼント

門倉がドンと酒を出すと峰岸は目をまるくする

峰岸 ……ジヨ二黒じゃないか……（門倉を見て）君、すごいなあ

門倉は峰岸の視線を無視し、原稿を鞆にしまう

峰岸 おい……それはダメなんだろう？

門倉 新聞は待ってくれませんか、これを下敷きに出しておきます。（当たり前のように）少し手を入れますけど、いいですね？

峰岸 手を？

門倉 間に合わないの

峰岸 ……ああ、構わんよ

門倉 じゃ先生、何か、いい案が浮かんだらすぐに連絡を下さい。薬や酒も足りなくなったら早く遠慮なく私にどうぞ

峰岸 ……いいのかい？

門倉 もちろんです。ドシドシやって頂いて、もっともっと、過激に！ もっともっと、刺激を！ ニュージエネレーション、ニンティーンセブンティーン！ です、先生！

峰岸 ……ああ……

門倉 そして、ピース！（促し）ほら

峰岸 ……そして、ピース
門倉 最後は「ピース」です

門倉は原稿を持って去る。峰岸は門倉が帰った瞬間、酒を煽り、寝転がる

OD・東京の女の部屋近くの道・14

運転手（永野と同じ役者が演じる）が、傘をさし待っていると門倉が出て来る。

門倉は当たり前のように運転手の傘の中に入る

運転手 坊ちやま

門倉 あれ、雨か？

運転手 はい、パラリときましたので

門倉 そう（峰岸の原稿をみながら）奥さんの言う通りだったな。これは手を入れなきゃ無理だ。で？
次は誰？

運転手 田浦先生でございます

門倉 あの人はヒロポンだったっけか？

運転手 はい

門倉 酒はなんだったっけ？

運転手 お酒はおやりになりません

門倉 へえそう。珍しい

運転手 ……さようで

門倉 父さんは反対するけどね、僕は、先生方には与えるだけ与えてやろうと思ってる。それで傑作が生まれるなら安いものさ

運転手 ……お車を回してまいります

運転手は去る

● パラソルをクルクル回して歌いながら、咲織が歩いてくる

門倉も同じ歌「世界の国からこんにちは」を歌い、傘をクルクルと回しながら去る

● 咲織は辺見の家の前に立つ

OB・海の近くの医者の子のソング・15

咲織 こんにちは

タミが出て来る

タミ あら、咲織さんこんにちは

咲織 (首に手をやり) 包帯、とりかえて頂けるかしら?

タミ あくえくと、奥様はお買い物で……今、先生を呼んできますね

咲織は中へ入ると、金魚を見に行く

咲織 元気ねえ

タミ はい、それだけが取り柄なので

咲織 え？

タミ え？（咲織の目線の先に気付き）あ、金魚の、ことですか
咲織 そうよ

タミ、照れ笑いをして辺見を呼びに行く

咲織 （金魚に）ヘンテコだねえ

咲織は金魚鉢に耳をつける

咲織 楽しい？ そう、楽しいの。フッフ

咲織は納得すると、パラソルをさし去って行く。タミ、辺見を連れて来るが咲織はいない

タミ あれ……いない

辺見 帰っちゃったか

タミ みたいですね

辺見は診療所に戻ろうとする

タミ あの……先生

辺見 ん？

タミ なぜ、包帯を取り換えなきゃいけないんですか？ 首に傷なんて、もうないのに

辺見 傷の治療を受けることが、彼女の精神にいいようだからね

タミ どうしてですか？

辺見 さあ、どうしてだか……心の傷は、今の医学ではまだまだわからんよ

タミ ヨードチンキつけるワケにはいきませんもんね

辺見 (吹き出す)

タミ わ、あの、私、変なコト

辺見 本当にヨードチンキで治せばいいんだが

タミ 恥かしいッ

辺見 いや、タミちゃんはいいい看護婦さんになるよ

● 峰岸はフラフラと起き上がり、酒をラッパ飲みする

● 金魚鉢に近づくと、酒を差し出す

● 峰岸 なんだ？ お前たちも飲みたいのか？

辺見も金魚鉢に近づくと

辺見 もしかすると、傷を持っている方が、楽なのかもしれないね
タミ (首をかしげる)

●酒を金魚鉢に入れる峰岸（※金魚たちは死ぬ）

●峰岸 どうした？ 大騒ぎして、嫌いか？ 酒は……

辺見 今日はもうあがっていいよ。患者さんもないことだし

タミ はい。じゃあ、また明日

辺見 また明日

タミは去る

●峰岸は着物から帯を引き抜くと自分の首に巻きつけ、グイッと引っ張る

●峰岸 あああああああっ

●峰岸は苦しくなり、そのまま倒れると、大の字になる

辺見はそれをまるで見ているかのように一瞥して去る

●マリア、入ってくる

OA・東京の女の家・16

倒れている峰岸を見つけるマリア

マリア センセイ？ どしたのセンセイッ？

峰岸はうなり、マリアは峰岸を布団に寝かせてやり、お土産の折を出す

マリア 鰻、買ってきてあげたからさ、あとで一緒に食べよ

峰岸 ……ああ

マリア アタイ、誕生日だったのよ

峰岸 ……え？

マリア 今日

峰岸 ……そうか、誕生日か

マリア 何度も言ったでしょ？ 今日、お祝いしてよねって

峰岸 ……そう

マリア 全然、思い出してくれないだもん。だからアタイ、怒ったのよ

峰岸 ……うん

マリア センセイなんか、捨てちまおうって思った

峰岸 ……そうか

マリア でもね、コレもらってさ（峰岸の前に本を出し）誕生日のプレゼントだって、もらったの

峰岸、本を見ると、ガバリと起き上がる

峰岸 誰にももらった

マリア 誰にって、アタイのキャバレーのご臈眞の……病院の先生の……お友達

峰岸 病院の先生の友達？

マリア ちょっとしたご縁でさ

峰岸 名前は

マリア 名前？

峰岸 聞かなかったのか？（マリアの身体を掴み）おい、名前はっ

マリア 聞いたよ、もう、痛いッ、離して

峰岸はマリアを離し、マリアは「もうー」と言いながら、名刺を渡す

マリア この人

峰岸 （名刺を読んで）……辺見……？

マリア そ

峰岸は小さく「まさか、まさか、まさか」とつぶやく

峰岸 歳は

マリア 歳？

峰岸 （名刺をかかげ）こいつの歳だ。俺みたいなジジイか？

マリア （笑って）違うよ、アタイとおんなしくらい

マリアは峰岸に絡みつく。峰岸はただただ、何かを考えている

マリア

アタイね、ここをブンって出てからさ、やっぱり、誕生日、誰かに祝ってもらいたいなあって
思ってたさ。林田先生とこに会いに行ったの、そしたら会いたくないっていいやがってさ、そ

れを伝えにきたのがその人なの。初めて会った人だけとき、アタイがメソメソしてたらさ、突然、（少し真似して）「峰岸は好き？」って聞いてきたの。アタイ、なんで、そんなこと知ってんだろって、びっくりしてね。思わず「好きだよ」って言っちゃったの。そしたらね、「これ誕生日のプレゼント」ってその本、くれたんだよ。笑っちゃうけどさ、アタイに本だなんて……

峰岸　でもさっ、ね、これってすごくない？　アタイと先生はやっぱり運命なんだよ

峰岸　運命か

マリア　うんっ！

峰岸　運命……

本と名刺を持って峰岸は出て行くこうとし、マリアは止める

マリア　センセイ？　どこ行くの？　ねえ

峰岸はマリアを振りほどき出て行き、マリアはその拍子によろけ、金魚鉢にぶつかりそうになる

マリア　わ、ごめんよっ

マリアは金魚鉢を見る——と、金魚たちの様子がおかしいことに気付く

マリア　……あれ？　やだ……みんな、どうしたの？

マリアは金魚鉢をつつくが、金魚はプカプカと浮かんでいる
マリア、ガバツと水の中に手を突っ込むと金魚を掴む——手の中に、金魚の死体がベタリ……

マリア ……なんで……

さらに水に手を突っ込み、金魚たちを掴む

マリア ……なんで？ ……なんでみんな、死んじゃったの？

マリアは金魚にほおずりして泣く——が、金魚から酒の匂いがすることに気付く
あたりを見回し、シヨ二黒の瓶が転がっているのを見つける

マリア ……

●寝間着姿に着替えた辺見が入ってきて、文机に座り日誌をつける
マリア、走り出る

OA・海の近くの医者の子の書斎兼寝室・17

辺見は新しい鉛筆を取ろうとして「イテ」となり、笑う。寝間着姿の彩が入ってくる

彩 どうなさったの？

辺見 (鉛筆を見て) えらく、尖らせたね
彩 あらそう(触ってみて) イテテ……ほんとだわ、ごめんなさい
辺見 あやまることじゃないさ。今日はもう少しかかるので、先に寝てなさい
彩 はい(布団に入ろうとして)……ねえ、あなた
辺見 ん?
彩 今朝ね……

彩、本のことを言おうか迷う

辺見 今朝、なんだ
彩 尚人さんが、納戸で「あの本」を見つけてね
辺見 ……
彩 読むって持っていっちゃった
辺見 そうか
彩 いけなかったかしら?
辺見 ……いけなかないさ、とめるのも変だろ
彩 そうよね

少しの間

彩 ……捨てるのも……なんだかと思って……とっておいたけど……
辺見 捨てるといい

彩
え？
尚人が読み終えたら

彩、辺見を見る。辺見は彩を見ていない

彩
はい
（彩を見ずに）うん

彩、布団に入る

彩
尚人……あの子……、いずれは東京に出るかしら

辺見

……
出るんでしょねえ……

彩
この方が性にあってることさ
え？

辺見
そう言っていたよ

彩
（嬉しそうに）ほんとに？

辺見
喜んでどうする。こんな田舎の医者に将来はないぞ

彩
……

辺見
まだ若い。焦らず、考えさせればいい

彩
（嬉しそうに）そうねえ

辺見
（その様子に呆れて）……まったく

彩 (小さく笑って) おやすみなさい

辺見 ああ、おやすみ

辺見はまた日誌の続きを書く

● 稜子、出て来て、金魚鉢を見る

OB・東京の作家の家・18

稜子 あら、子供が生まれてる

峰岸が帰ってくる。手には本の入った紙袋

稜子 (驚き) ……あなた

峰岸 やあ

稜子 ……お帰りなさい

峰岸 うん、ただいま

稜子 ……こんな遅くに、どうして

峰岸 どうして? 自分の家に帰ってきちゃいけないのかい? 早く君に会いたくて、車、飛ばしてきたんだぜ

峰岸のウキウキした様子に稜子はどう接していいか判らない

稜子　ねえ、あなた、子供が生まれたのよ

峰岸　誰の？　え、まさか？？　でも君のお腹、ちっとも

稜子　（呆れて）私じゃありませんわ、金魚ですわ

峰岸　なんだ金魚か、驚かせるなよ（金魚鉢を覗き）お、ほんとだ……お前たちも、めでたいな

峰岸、稜子の手をとる

峰岸　稜子

稜子　あなた？？

峰岸　ねえ、明日、海に行かないか

稜子　海？

峰岸　行こうよ、海へ

稜子は峰岸がいつものように薬でうりうりしていると思う

稜子　……大丈夫ですか

峰岸　さあね、大丈夫かどうかも、行っただのお楽しみさ

稜子　え？

峰岸　でもうん。きっとそうだ、きっと

峰岸の頭の中で音楽がなる

●辺見 さてと……

●辺見、日誌を書き終わり、布団へと向かう

峰岸 ねえ、踊ろう

稜子 え？

峰岸 踊ろう

稜子 あなた、なんですか？

峰岸 (音楽に合わせて) ヲララ、ララララ

峰岸と稜子は踊り出す——峰岸の頭の中ではみんなが踊っている姿が浮かぶ

●辺見が布団に入ると彩が小さく笑う

●辺見 冷たいか？ 足

●彩 ……少しだけ

峰岸 海だよ、君。ねえ、海へ

●辺見と彩は優しく抱き合って眠る

峰岸と稜子は抱き合い踊っている

——暗転

——次の日の朝・晴れ

突堤に座って空を見ている尚人。パラソルをクルクル回して咲織がやってくる
少しの間——永野が出て来る

永野 咲織さん、おはようございます

咲織 お巡りさん、おはよう

永野 お散歩ですか？

咲織 待ってるのよ

永野 誰を

咲織 誰って（笑って）いやねえ

永野 あ、そうか

尚人 （永野と咲織を見つけ）おはようございます！

咲織と永野は尚人を見上げる

永野 釣りですか？

尚人 いや、さっき夜勤明けで帰って来て……富士山があんまりキレイだったから

咲織 リチャード！

咲織は突堤まで走ると尚人に抱きつく。永野は咲織を追おうとして転び、出遅れる

咲織 Richard, take me with you (じチャード、一緒に連れてって)
尚人 いや、違います、僕は
咲織 I've been waiting for you...so long. (私、ずっと待っていたのよ、あなたを)

尚人は思い切り抱きつかれバランスを崩し落ちそうになるが、永野に助けられる

永野 (息を切らし) 咲織さん、ダメですよ
咲織 なあに？

永野 この人はリチャードさんじゃありません

咲織 そうよ(永野に) いやだ、あなた、間違えたの？

永野 あのお

咲織 おばかさんっ

咲織、落としたパラソルを持つとクルクル回し、歌い出す

永野 まったく

尚人 助かった……に、してもすごい力だね、あの人

永野 昨日、辺見先生もそこで釣りをしていて落とされそうになったんです

尚人 え？ うちの父さんも？

永野 親子揃って油断しすぎですよ

尚人 すみません

咲織　ごきげんよう

永野と尚人（またつられて）ごきげんよう

咲織、ニッコリと微笑むと歌いながら去る。二人の男、咲織を見送る

永野　なんで、いつもあの歌なんでしょう

尚人　……うん

永野　♪こんにちは、こんにちは……か……

尚人　楽しみなのさ、あの人なりに

タミが出て来る

タミ　何、二人してポカーンとしてるんですか？

永野　タ、タミさん

永野はタミが好きらしく、急にかしこまる

永野　（敬礼して）ご苦労様です

タミ　え？　まだ、出勤前ですけど

永野　は

尚人　僕も帰るよ、一緒に行こう

タミ　あ、私は卵を買ってから向かいます

永野 卵は、坂下さんのところですか？

タミ そうですけど

永野 ほ、本官も、そちらに用事があるので一緒に

タミ ええ（尚人に）じゃあ、後ほど

尚人 うん（永野に小さな声で）うまくいきますように

永野 な、なにを、おっしゃって……

尚人 あ、タミちゃん、行っちゃったよ

永野 （敬礼して）では！

永野、慌ててタミの後を追う。尚人はそれをほほえましくみながら、別の方向へと去る

●マリアが公衆電話で電話中

OD・駅のフォーム・公衆電話（違う場所）・20

子供のようにはしゃいだ様子で峰岸が出てくる。プラットフォームと汽車を確認して

峰岸 お、ここだここ（奥に）稜子、ほら奥さん！ こっちこっち！

稜子が出てくる

峰岸 さ、乗ろう！ そうだ、駅弁買わなくっちゃな。どこに売ってるかしら

●マリア 男の林田先生ってのいるでしょ？

稜子 ……

●マリア いるのはわかってんだよ

峰岸 どうしたの？ 稜子ちゃん

稜子 私……

●マリア じゃ病院行くよ

稜子 行かない

峰岸 はあ？

●マリア 待ってろって伝えてっ

稜子 行かないわ

●マリア、電話を切ると走り去る。

稜子も走り去る。一人残された峰岸

峰岸 おい、ちょっと、待てよ

峰岸、一瞬、マリアを追いそうになって「違う違う」と稜子を追う

OB・海の近くの医者の子のリング・21

辺見は白衣を着て新聞を読んでいる。彩が出て来る

彩 お茶でも召しあがりますか

辺見 ああ（見回して）……尚人は？

彩 さっき帰ってきたんですけれど、少し寝るって……

辺見 そうか。釣りに誘おうと思ったが

彩 寝かせてやってくださいな、夜勤明けですから

辺見 うん

彩 （新聞を覗き）何か面白い話、載って？

辺見 万博、万博でどこもかしこも大騒ぎさ

彩 もうすぐだものね

辺見 ああ

彩 大阪かあ……行けないわねえ

辺見 （苦笑）

彩 テレビでやるかしら

辺見 そりゃあ、やるだろうよ

彩 栗原のおばちゃんのところ、カラー買うんですって

辺見 お、いいね。見せてもらおう

辺見は新聞をめくる。二人、何かを見つける

彩 ……あら

辺見 始まったよ、新聞の連載

彩 ご活躍ね

辺見 ああ

彩 ああ

彩は辺見を改めて見る

彩 あなた

辺見 ん？

彩 アッという間ね、何もかも

辺見 ……

彩 幸せだわ、私

辺見 なんだい、急に

彩 なんとなく

辺見は彩を見る

辺見 幸せだな

彩 ……

彩、噴き出す

辺見 なんだよ

彩 ごめんなさい、あんまり真面目な風だから

辺見 君が言い出したんだろ

彩 (笑いながら) そうですけど

辺見

かいがないなあ

彩

(笑いながら) 本当にごめんなさい

辺見

笑いながら謝るやつがあるか

タミがやってくる

タミ

おはようございます

辺見

おはよう

彩

おはようございます

タミ

(彩に) これ、坂下のおじいちゃんこの卵、買ってきました

彩

ご苦労様(辺見に) 昨日、アオサを頂いたので卵焼きにしようと思って

辺見

いいね、ありやうまい

タミ

じゃあ、これ台所に

彩

ええ、お願い

タミ

(台所に行きかけて) あ、そうだ！(辺見に) なんか、お客様みたいです。診療所の前で立っ

タミ

てらしたのでこちらに

辺見

僕に？(彩をみて) 誰か来る予定はある？

彩

いいえ

タミ

あ、あの方たちです

タミが見上げると、階段の上に峰岸と稜子の姿(※今までの舞台の使い方と少し異なる) 峰岸は着物にパナマ帽にステッキを持ち、稜子は着物に羽織りを羽織っている

峰岸は二人の姿をとらえ「おおお」と唸り、稜子は愕然とする。辺見と彩は呆然と見上げている

峰岸 当たった！ 僕の勘は当たった！

峰岸は辺見に走り寄ると、抱きしめる

峰岸 辺見、辺見っ！

辺見 ……峰岸

峰岸 (髪を触って) ああ！ こんなになっただけだな、そうさ僕だ

辺見 ……

二十年、いや、もったか？ ハハハ、お互いずいぶんふけちまって、いや、君は前よりも健康
そうだ、おろ、ずいぶん、焼けているな。やっぱり海だね、海が近いから

峰岸は彩を見る

峰岸 彩ちゃんだ……こりゃ、本物だ

彩 ……

峰岸 彩ちゃん、生きていてくれた……生きて……

峰岸は辺見を離すと今度は彩を抱きしめる。稜子はただ、黙ってその様子を見ている
寝ぼけ眼の尚人がでてる

尚人 何、騒いでるの？

彩、気を失う

峰岸 わっ

辺見 おいっ

彩を支える峰岸と辺見——暗転

OB・海の近くの医者の子のリビング・22

峰岸と稜子がいる。峰岸はウキウキと部屋を歩き回っている

峰岸 おいご覧。ここにも金魚がいるよ

稜子 ……

峰岸 自分が捨てた人の数だけ、金魚を飼うといいと誰かが言ってたよ。辺見もその口かしら(数えて)ひいふうみい……

OA・海の近くの医者の子の書斎兼寝室・23

布団が敷かれ彩が寝かされている。枕元には水差しと水のコップ。尚人と辺見が側にいる

辺見 尚人、診療室に行ってくれ、タミちゃんだけじゃ心配だ
尚人 でも……あの人たち、どういう……
辺見 あとで話す。今は、行ってくれ
尚人 ……はい

尚人は、診療所へと向かう
辺見、彩の頭をなでる

辺見 ……

辺見はリビングに向かう

OB・海の近くの医者の子のリビング・24

稜子 教えて下さればよかったのに
峰岸 なにが
稜子 ですから
峰岸 だって確信はなかったからね
稜子 それでも
峰岸 君を驚かせたかったんだ
稜子 ……
峰岸 ほら、君のそんな顔、初めてだもの。してやったり！ 大成功だ！

稜子

……

峰岸

「奥さん、僕だって君に勝つこともあるんだぜ

稜子

はしゃいでらっしゃるわね

峰岸

そうさ

稜子

そんなに嬉しいの？ 彩さんが生きてらして

峰岸

当たり前だろ、そりゃ

辺見、入ってくる

辺見

お待たせして悪かったね

峰岸

いやいや、こちらこそ、驚かせてしまつて……彩ちゃん、具合はどう？

辺見

少し寝ていれば、まあ、大丈夫だろう

稜子

ごめんなさい、突然、押しかけて……

辺見

……

峰岸

昔の仲間が揃つたな

峰岸はスキットルを出す

峰岸

同人誌「稜線」の同士、我らの再会を祝して

峰岸はグビリと飲むと、それを辺見に差し出す

峰岸

さあ

辺見

いや、僕はまだダメだ

峰岸

(稜子に) じゃ編集長

稜子

(いらないと、首をふる)

峰岸

なんだよ二人とも、もっと喜べ！ (と、また酒を飲む)

稜子

(峰岸に) あなた、何故ここを？

峰岸

^^^

稜子

(辺見に) 私、何も知らずに連れてこられたのよ

辺見

……

稜子

ほんとに、何も知らずに

峰岸

聞きたいかい？

稜子

ええ

峰岸

では種明かしをしてしんぜよう

峰岸、本を出し、二人の前に置く。辺見も稜子も「あ」と小さく声を出し驚く

峰岸

そう。これはボクが彩ちゃんに「あの日」贈った本だ。日本に、いや世界にたった一冊しかない

辺見

「細き君の手」の見本版だ。コレが昨日、僕の前に忽然と現れた

峰岸

……

細かい経緯は知らんがね、僕の女が(稜子をみて)コレじゃないよ。ネタのための女だ……そいつが「ある男」に誕生日のプレゼントとして、もらったと言う。で、女が見せた「ある男」の名刺がこれだ

峰岸は尚人の名刺を二人に見せる

辺見　これは……尚人の

峰岸　僕はね、「辺見」の名前を見てすぐにピンときた。この二十年近く、忘れたことのないなかつた彩ちゃんと君の姿が、こう、眼前に現れて……（部屋の中を見渡して）何故だかわからんが、君たちが一緒にいる姿さえ、浮かんだ……

稜子

……
勘だよ、ホントにただの勘だったが……結果は大当たりときた！

峰岸

峰岸は自分の頭をトントンと叩く

峰岸

奥さん！編集長！　僕のこは、まだまだ健在だぜ！　この「運命」を……いや陳腐な言葉だが、「僕らが集う運命」を的中させたぜ！

辺見は小さく笑いだし、やがてそれは大笑いになる

辺見

……すまん、すまん。いやしかし……
いや、わかるよ。僕も笑いたい気分だ

峰岸

辺見

（笑っている）
現実には小説より奇なりということさ

峰岸

辺見

奇々怪々だ

峰岸 だろ

辺見 いや……まったく……油断だ……油断した

峰岸 油断？

辺見 いいか？峰岸。この本を、僕の息子が、我が家の納戸から、持ちだしたのは「昨日」だよ

峰岸 昨日？

辺見 ああ、昨日だ

峰岸 本当に昨日？

辺見 ああ

峰岸 たった？

辺見 ああ、たった「昨日」だ

峰岸 待てよ。たった二日……（考えて）いや、たった一日ちよつとで、二十年以上、止まっていた

時の針が動き出したというわけか？

辺見 そうだ

峰岸 なんと……（笑い出す）

辺見 君、これ、書けよ

峰岸 書けるか、こんなこと書いたら、バカにされるのがオチだ

二人の男は大笑い。稜子は笑ってはいない——と、突然、峰岸はプルプルと身体を震わせる

峰岸 便所

辺見 え？

峰岸 悪い。興奮したら……小便が……便所はどこだ

辺見
峰岸
（笑いながら）玄関の横さ
すまん、借りる

峰岸、出て行く

辺見
相変わらずだね、峰岸は

少しの間

稜子
辺見君

……

稜子
あなた何故

辺見
（制して）君はアしを一流にした

……

辺見
妻になり、芥川もとらせた

稜子
そうよ。私がとらせた

辺見
夢が叶ったんだ

……

辺見
だからもう、昔の話はよそう。何十年前の……

●峰岸が帰ってくるがリビングには戻らず彩の寝ている場所へと向かい、彩の側に座る

辺見 怒るなよ編集長、もう時効だ

稜子 怒ってなどないわ

辺見 いや怒ってる。君は本気で怒ると右側の頬がひきつるんだ

辺見は稜子のほほを触る

● 峰岸は彩のほほを触る

★ 彩と稜子、少し唸る

● 峰岸は怖がり、リビングへと向かう

稜子は辺見の手をはねのける

辺見 変わらないね君も

稜子 ……

辺見 でも僕たちは変わった

稜子 そう

辺見 僕と彩は

峰岸 (リビングに入り) 辺見、彩ちゃん唸ってたぞ。大丈夫かな

辺見、向かおうとする

稜子 私が

辺見 ……え

稜子 お二人で、積もる話もありでしょうし

峰岸 そうだね、みてやんなさい。部屋はトイレから真っ直ぐのところさ
辺見 (少し慌てて) いいよ、君が行かなくても
稜子 辺見くん、私、そうバカじゃないわ

稜子は外に出る。が、そのまま、そこで二人の話を聞く

峰岸 え？ なに、今の

辺見 さあ、わからん

峰岸 怪しいなあ、焼け木杭に火がついたか

辺見 何を言ってる

峰岸 知ってるぜ、君がアシを好きだったのは

辺見 峰岸

峰岸 だって君、いつもアシの言いなりだったじゃないか。加勢してばかりでさ、僕は君ら二人にい

つも「書け」「書け」と責め立てられた

辺見 そりゃ、君の才能をアテにしていたからさ。君が書かなきゃ同人誌は売れなかった

峰岸 それだけか？

辺見 ……

峰岸 ハハハ、いいねえ、シジイが、若き日の恋の話だ！

辺見 ……僕が好きだったのは君だ

峰岸 僕？

辺見 ああ

峰岸 おおおお、突然の告白

辺見 知っていただろう？
峰岸 うむ、実は知っていた……

峰岸、突然、辺見をギュウと抱きしめるがすぐに嘔き出し、辺見も「やがて」笑う

峰岸 オエツ、よしてくれ辺見、冗談ポイだぜ

辺見 ……ハハ

峰岸 おい。聞かせろよ、君と彩ちゃんの経緯をさ

辺見 ……

峰岸 なあ、なぜ、こうなった？

辺見 よくある話だよ。お互い焼け出されて、避難した先で出会ったってヤツだ

峰岸 君の父上がよく許したね

辺見 うちは僕以外、全滅だったからね。だからまあ、自由にやれた

峰岸 そうか……そりゃ、残念だったな

少しの間

峰岸 彩ちゃんは僕を恨んでないかい？

辺見 (苦笑して) 急に核心にふれるね

峰岸 茶化すなよ。君、知ってるだろう。僕が彩ちゃんを置いて逃げたこと……読んだろ？「戦火の華」

辺見 ああ

峰岸 あの通りさ

辺見

……

峰岸

僕は自分ひとり、助かろうと彩ちゃんを見捨てて……

辺見

恨んでやしないよ

峰岸

……

辺見

あの戦火の中、皆、誰かを見捨てなくちゃならなかった。仕方のないことだ

峰岸

でも僕は結果、書いた……アシを利用して……

辺見

君は作家だもの、そうでなくっちゃ

峰岸

……

辺見

それに「戦火の華」の女は、実際、死んだんだ

峰岸

え？

辺見

ここで生きているのは、ごく普通のどこにでもいる女さ

峰岸

……

辺見

平凡な医者妻さ

峰岸

(辺見をつついて) ノロケはやめてくれ

● 稜子は彩の寝ている部屋へと向かうと、布団の側に座る

峰岸は薬瓶を出すと、スキットルの酒と一緒に飲む

辺見

見せろ

峰岸

ん(瓶を見せる)

辺見

ゼドリンの2ミリか、どのくらいやってる

峰岸

まあ、7錠程度だ

辺見　あまり多いとダメだぞ。それから酒と一緒に飲むな。悪く回る

峰岸　(スキットルを持ち) いや、これと一緒にやると多少の成分が排泄されて身体にはいい

辺見　(あきれて) 君、そら、素人診断だよ

峰岸　効き目も早いしな。実際、これがないと「編集長」には太刀打ちできないのだ。あの人は変わらず、僕を責めたてる

辺見　君に心底惚れているんだね

峰岸　僕の「書くもの」にね

辺見　……

峰岸　しかしこのとこ、なかなかお眼鏡にかなわないから大変だ(瓶を取り返し) おい、なくなったら、頼むよ

尚人が辺見と峰岸の部屋へとやってくる

尚人　父さん

辺見　……

尚人　父さん

辺見　なんだ?

尚人　栗原のおばあちゃんが、父さんでなきやダメだと言っんです

辺見　そうか

峰岸　行けよ

辺見　すまん、ちょっと

辺見、去る。尚人は峰岸を見る

峰岸 尚人くん、だったね。お騒がせしてしまった……峰岸です

峰岸は手を出す。尚人は怪訝な顔で握手をする

峰岸 峰岸慶次です

尚人 (驚いて) え？ 作家の？

峰岸 ああ

尚人 なぜ、ここに？

峰岸 (吹き出す)

尚人 (わけがわからず) あの……？

笑っている峰岸

尚人 あのっ、釣りに行きませんか？

峰岸 釣り？

尚人 いや、あの、いい天気だし……すぐその突堤です。父も栗原のおばあちゃんにかかっちゃ

峰岸 時間はゆうにかかるから、待ってる間の暇潰しに

尚人 君と二人で？

峰岸 はい

尚人 行くか

尚人　　はいっ！

尚人は峰岸を連れて去る

●林田が白衣のまま出てきて、落ち着かぬ様子でマリアを待っている

OD・尚人の勤める病院近くの道・25

マリア出てくる

林田　　マリアちゃん
マリア　　どうも、林田さん

林田は人目につかない所に連れて行こうとするがマリアは逃げる

林田　　（小さな声で）マリアちゃん、ここにきちちゃ困るよ……（びっびつと）辺見のやつ何やってんだ……あのね、マリアちゃん、またレインボーに行くからさ……チップだって弾むからさ、今日のところは……

マリア　　あの男、どこにいんの？

林田　　は？

マリア　　あんたの代わりに来た男だよ、あんたの友達

林田　　辺見か？

マリア　　だからそいつは、どこにいんのさ！

林田 夜勤開けで家に帰ったけど……え？ あいつに何かやられたの？

マリア 誕生日のプレゼントだって、本をくれたんだよ。峰岸センセイの本よ

林田 あ、そう

マリア そしたらセンセイいなくなっちゃまったのよっ！

林田 (わけがわからず) は？

マリア とにかく教えな、その、辺見ってのの居場所

林田 いや、それはまずい……だろ……

マリア ならキャバレーでのこと、病院中に言いふらしてやる！

マリア、走り去る

林田 わっ、待って。それは困る、困るよっ

林田、追いかける

●尚人が突堤に峰岸を連れて行き、釣竿を持たせ、座らせる

〇〇・海の近くの突堤・〇二〇

峰岸 (恐る恐る釣り竿を持って) こう、かな

尚人 やったことないんですか？

峰岸 恥ずかしながら、ない

咲織がクルクルとパラソルを回し、歌いながら出て来る

咲織
こんにちは

尚人
こんにちは

咲織
（峰岸に）釣れまして？

峰岸
無理でしょう、初めてですから

咲織
あら、まあ、初めて

咲織は峰岸の側に寄る

咲織
冷たいかしら

峰岸
は？

咲織
落ちたら

峰岸
さあ、もう三月だ、暖かいかもしれません

咲織
うふふ、外れよ

峰岸
何が

咲織
冷たいのよ海は、知らないの？ あなた

峰岸
知らない

咲織
じゃあ触ってみる？

咲織は峰岸の手を掴もうとするが尚人に阻止される

咲織 痛い

尚人 違いますよ

咲織 なにが？

尚人 この人、リチャードさんではないですよ

咲織 いやねえ、違っわよ（峰岸を改めてみて）全然、違っわ（尚人をみて）おかしいの

咲織は幸せそうに笑うとパラソルを持ちクルクルと回しながら去る

峰岸 あの人、どうしたの

尚人 旦那さんがアメリカ軍の将校だったんですが、ベトナムで戦死されて。彼女、そのショックか

ら首を吊って……まあ、助かりはしたんですが

そう

この突堤に誰かがいると、彼女はリチャードさんが……その亡くなった旦那さんが……

迎えに来たと思うようで

面白い

面白い？

ああネタになる。小説のね

……

すまん、悪い癖だ

……はあ

お父さんとお母さんはどう？

（突然の質問に面食らい）どう？ とは

峰岸 だから、あれだ。仲いいとか悪いとか

尚人 ……えと、いいと、思います

峰岸 思う？

尚人 いえ、いいです。すごく

峰岸 そうか。なら、ま、よかった（何気なく）君はいくつ？

尚人 24です

峰岸 ってことは君は……（何年生まれになるのか？）

——と、峰岸にはある「事実」が、思い当たる。峰岸は初めて尚人をまじまじと見る

峰岸 あれ……え？ ……君……

尚人はまじまじと見られ、なんとなく居心地が悪くなる

尚人 何か……？

峰岸 君は……知らんのか？

尚人 （質問の意味も意図もわからず）何がですか？

峰岸 なるほど

尚人 は？

峰岸 いや、もういい

峰岸は取りつく島もなく釣りに戻り、尚人はどうしていいかわからない

稜子、鉛筆立ての鉛筆を触ってみる、みな、キレイに尖っていることに気付く

稜子 (触って) イタッ
彩 (目を覚まし) ……あ……

彩、起きようとしてふらつき、稜子が身体を支える

稜子 まだ寝てらして
彩 いえ、もう

稜子、彩に水をついでやる

稜子 お水、お飲みになる？
彩 ……すみません(水を飲む)
稜子 本当にごめんなさいね、急にやってきて
彩 (首を振る)
稜子 驚かせてしまったわね
彩 いえ、私が大袈裟ですよ、すみません

稜子 私もね、何も知らなかったんですよ

彩 ……え？

稜子 峰岸ったら何も言わずに「海に行こう」だなんて、私をここに

彩 まあ

稜子 おかしいなとは思ったんですけど。あの、妙に浮かれているし

彩 ……

稜子 でもね私、峰岸と二人で海なんて、いえ、二人でどこかに出掛けるなんて、滅多にないこと

ですから、つい……来てしまいましたの。そうしたらあの、海には見向きもせず、まっす

ぐこちらへ

彩 ……そうだったんですか

稜子 でも本当に生きてらして良かった。……これで、あの人も心の痛みから解放されますわ。辺見

君とも、お幸せそうで……(気付き)あらやだ、私ばかり……ごめんなさい

彩 (首を振る) いいえ

稜子 それに……そうだわ、初めましてですわよね私たち

彩 ええ

稜子 峰岸の妻の、稜子ともうします

彩 辺見からお名前は。私は彩です

稜子 辺見、彩さん

彩 はい

稜子は改めて彩を見てほほ笑む

稜子 私、普段はこんなにお喋りじゃなくてよ。でもなんだか、あなたとは初めての気がしなくて

彩 ……

稜子 きっとあなたが、峰岸の書くものに出てらっしゃるからね

彩 ……

稜子 辺見さんは何か書いてらして？

彩 いえ、今はまったく

稜子 そう

彩 私が身体を壊して色々と大変だったので、きっとそれで……

稜子 ……身体を？

彩 後遺症が出たんです。空襲の時、煙を吸い過ぎしまったので、神経の麻痺が酷くて、精神的に

ちよっと……

稜子 まあ……今も？

彩 いえ。今はもう、ほとんど

稜子 そう、それは良かったわ

彩 ……ええ

稜子 辺見くんが良くしてくれたのね

彩 ええ、そうですの

少しの間

稜子 あなた、お読みになって？

彩 辺見のものですか？

稜子 いいえ、あなたをモデルに書いた峰岸のもの

彩 (首を振る) いいえ

稜子 なぜ

彩 なんだから、恥ずかしくて

稜子 恥かしい？ 峰岸の書いたものが？

彩 いえ、そういう意味じゃなくて……なんて言うんでしょう……私など、良くはないでしょうし

彩 ……自分のことなど読んでも

稜子 いいえ、素敵でしたわ

彩 ……

稜子 あなたはとても素敵に書かれていましたわ。私はずっと峰岸のそばで、あれの編集のようなこ

とをしていますが、他のモデルはダメ、あなたが一番でしたわ

彩 ……

稜子 だから読んでやって下さいな、一度是非

彩は小さくうなずくが、気持ちが悪くなる

彩 ……すみません、少し横になっても

稜子 あら、ごめんなさい、気付かなくて

彩は横になる——すこしの間

稜子　ねえ、尚人さん、おいくつ？

彩　……え？

稜子　おいくつ？

彩　……お子さんは？

稜子　うちはダメなの、出来なくて

彩　……

稜子　でもね、峰岸ね、ああ見えて子供が好きなのよ

彩　……

稜子　欲しかったでしょうね、自分の子供。今でもきつと欲しいわよ

彩は起き上がると稜子の着物の袖を持つ

彩　あの、尚人は、あの子は今どこに？

稜子　さっき、峰岸と出て行ったようだけれど

彩は部屋を飛び出す。稜子は投げ出された布団をたたもつとするが、床にたたきつける

稜子　（小さく）読んでないなんて……

●尚人　引いてます！

峰岸と尚人は格闘している

尚人 かかったんですよ

峰岸 なに？

尚人 だから魚が、ほら、竿をしっかりと持って！

峰岸 こ、こうかな、こう……

尚人 ダメですよ、もっとゆっくり、ゆっくり！

峰岸 わらう、これどうすりゃいいんだよう

尚人 そのまま、逃がさないようにゆっくり

峰岸 こうか？

尚人 こっちこっち……わ、これ、ヒラメですよ！ すげー！

彩が出て来る。二人が魚を釣りあげているところが、もみ合っているように見える

彩 何してるのっ！

尚人 あ、母さん

峰岸 彩さん

彩 やめて、何してるのっ！

峰岸と尚人 ええ？

彩 お願いやめてっ！

彩、二人の身体を掴もうとする

峰岸 ヒラメッ!

尚人 ヒラメが釣れたんだよっ

彩 ヒラメ?

尚人 母さん、そのバケツとって

彩 あ、え? これ?

尚人 そうだよ、ほら早く

彩、バケツを取る。尚人と峰岸はヒラメを捕まえるとバケツへと入れる

尚人 わくわく、やったあ!

峰岸 釣れた、釣れたよ!

彩 ……ヒラメ

三人はバケツを覗く

峰岸 おおおお

尚人 やったっ! ヒラメ!

峰岸 (果然と) ここって魚、釣れるのね
え?

尚人 父さん、釣ったことないんですよ

峰岸 ヒラメを？

尚人 いいえ、何も

峰岸 へえ

尚人 (峰岸に)あのこれ、父さんに見せてやっていいですか
峰岸 そら、もちろん

尚人、バケツを持ち、走り去る

峰岸 なんだいありゃ

彩 え？

峰岸 さっき、ほら(真似をして)「やめて、何してるの、お願いやめて」って

彩 ……

峰岸 僕が彼に何かすると思ったの？ いや、彼が僕にかな？
彩 あの子は何も知らないの

峰岸 らしいね

彩 ……ですから

峰岸 (おどけて)さてさて、どうしたものかしら

彩 峰岸さん！

峰岸 うわ怖い

彩 ……

峰岸 君がそんな顔する女になったとは

彩 ……どんな顔？

峰岸 鬼だよ、鬼

彩 ……

峰岸 やだねえ、すっかり「母親」になっちまって

彩、顔を繕って笑って見せる

峰岸 今更遅い

彩 ……

峰岸 (鼻で笑って) 言わないよ、言うもんか。僕は子供が嫌いだったの、君、知ってるだろ？

彩 ……

峰岸 しかし(育ててくれて)ありがとう……と、礼を言うべきなのかな

少しの間——峰岸は改めて彩を見る

峰岸 ……でも君、よくあの火の中……生きて……

彩 シ〜ッ

彩は自分の口に指をあてる

彩 あの頃の話はナシ。思い出すと(自分の胸に手を置いて)ここに良くないの
峰岸 そうか

彩 だから……

峰岸 わかった

彩 ……奥様、キレイな方

峰岸 そうなんだ

彩 (小さく笑う)

峰岸 だってそうだろう？

彩 そうね

峰岸 僕の大事な編集長だ

峰岸、まわりを見回し

峰岸 ここは平和だね

彩 そうなの

峰岸 君は化けたな

彩 幸せだもの私

峰岸 そう

彩 ええ

彩は峰岸を見る

彩 ねえ……峰岸さん

峰岸 なんだい、彩ちゃん

二人、小さく吹き出す

彩 これは夢だと思えない？

峰岸 ……夢？

彩 死んだはずの女が、どこか遠くの、海が近い町で生きていた

峰岸 ……

彩 でも目が覚めたら、何も思い出せないの

峰岸 思い出しちゃいけないか

彩 「鬼」の顔なんてイヤだわ

峰岸 (鼻で笑って) 女ってやつは……

尚人、姿を現す

尚人 母さん、何してんの？ 父さんが呼んでるよ

● 彩は峰岸から離れ、家へと向かう

峰岸、薬を飲む

咲織が歌を歌いながら、パラソルを回して出て来る

峰岸 こんにちは

咲織 こんにちは

咲織、行こうとする

峰岸 リチャードだよ

咲織 (ボカんとして) え？

峰岸 リチャードだよ、僕は

咲織 Is he crazy? (この人、頭がおかしいのかしら)

峰岸 ねえ

峰岸が寄ってくるので咲織は逃げる——パラソルを手から落とす

咲織 Look, you're nothing like Richard. How dare you! Richard was an awesome guy.

His eyes were much more beautiful. He smelled better, and...

(あのね、リチャードはあなたのような人ではありません。とても素敵なお人なのよ。もっと目がキレイだし、いい匂いがしたし、それよね)

峰岸 僕は英語はダメなんだ、日本語で話してくれ

咲織 You're not him. Don't you get it? He was the love of my life and I was his.

(あなたじゃないのよ、わからない？ 私が愛した人はあの人だけなの。私を愛してくれた人もあの人だけなの)

峰岸 日本語でしゃべれっ！

咲織は耳を押えて叫ぶ、その叫びは止まらない

峰岸 ごめん、ごめん、悪かった……あの、悪かった

峰岸はどうしていいかわからない——が、やがてその叫びは止まる

咲織 (ニッコリと) さようなら

咲織、パラソルをクルクルと回しながら去る

峰岸 ……さようなら……か

辺見、出て来る

辺見 (峰岸に) おい、ヒラメ、刺身でいいか

峰岸 ああ、いいよ

——暗転

OA・海の近くの医者の子の書斎兼寢室・29

明るくなると笑い声が聞こえてくる。ちゃぶ台がおかれ、食事のあとの様子残っているのはそれぞれのコップと酒の瓶。峰岸と辺見と稜子と尚人がいる。皆、それなりに酔っぱらっている。特に尚人は酔っぱらっていて、少しコックリやっている。片付けを終えた様子

で、彩が部屋に入ってくる——※以下、話ながら、酒を飲んだり、注いだりする。
彩は酒は飲んでいない。誰かに注がれそうになっても断る

稜子 (彩に気付き) あ、すみません、何もかも

彩 いえ、タミちゃんがほとんど片付けてくれて (辺見に) もう帰ってもらいましたけど、良かったかしら？

辺見 ああ、いいよ

稜子 本当に急なことだったのにすみません

彩 いえ、ありあわせの田舎料理で……恥ずかしいわ

峰岸 いやいや久しぶりに「ご馳走」だったよ (稜子を見て) うちじゃ、なかなか一緒にメシを食うことがなくて

稜子 ……ええ

峰岸 いいもんだなあ、こういう団欒も (稜子に) 今度やってみようよ

稜子 そうね

峰岸 うらやましいぞ辺見、毎日こうか

彩 ヒラメは出ませんわ

辺見と峰岸 ヒラメッ！

峰岸 ありやうまかったなあ。さすが、とれたてだ

辺見 初釣りでアシとは……

峰岸 ハハハハ

辺見 一匹も釣れない僕の身にもなってみろ

峰岸 (彩の身体を触り) 拗ねてるね

彩
ええ

峰岸が妙に彩に慣れ慣れしいのが気になる稜子と辺見。尚人が突然、立ち上がる

尚人
いや〜、しかし、ホントにホントにビックリです
彩
(胸を押えて) いやだ、こっちがビックリだわ

皆、彩と同様、それぞれに驚き、苦笑する

尚人
ボクが昨日……たまたま、そう、たまたま、納戸で見つけたこの本「細き君の手」が、戦争で引き裂かれ音信不通になっていた学友たちのなんじゅ〜ねんかぶりの再会劇を招くとは！
本当にもうビックリすぎて……まいったな「ビックリ」って言葉しか出てこない(峰岸に)すみません、語彙が少なくて

峰岸
実際「ビックリ」だ。間違いない
尚人
良かった！ 万歳っ！

彩
あなた、ずいぶん酔ってよ、もう寝なさい
尚人
(峰岸を指さし) この人は、あの有名な作家、峰岸慶次さんであった！ 1(いち)、ビックリ！

大人たち、それぞれに笑う

尚人
そしてなんと！ 父さんと峰岸さんが医学部の同級生でしかも同人誌を作っていた！ 2、
ビックリ！

峰岸 君のお父さんは本物だったが僕は兵役逃れた。3、ビックリ！
尚人 いえ、そこはビックリしない
峰岸 なんだよ（辺見に）どういう基準だい
辺見 （苦笑して）さあな
尚人 母さんも書いていたの？
彩 ……いえ、私は……
稜子 私たち女は、書くよりも読む方だったの（彩に）ね
彩 ……ええ……
峰岸 （尚人に）じゃあこれは？（稜子を指さし）僕の奥さんは、その同人誌の編集長だった
尚人 （稜子を見て）編集長か！ そら、すごい！ 3、ビックリ！
峰岸 おくく！
稜子 （峰岸と辺見を見て）この人たち、私にたかっていたのよ
峰岸 おい
尚人 たかっていたとは？
辺見 （峰岸に）編集長も酔ってるね
峰岸 （辺見に）随分飲んでる
稜子 この二人は、私の親が営んでる家に下宿していてね。同人誌を発行する資金は全部、私が払っていました！
尚人 （峰岸と辺見に）そうなの？
峰岸 そうだっけ？
辺見 （苦笑して）そうだ
稜子 どう？ これ、4、ビックリ！ にならない？

尚人 (考えて) うゝむ。へゝゝとは思つが、4、ビックリではない。何かが違う

稜子 ほんと基準がわからないわ

だろ？

尚人 父さんはどんなものを書いていたんですか？

峰岸 ミステリーさ

尚人 へゝゝええ！ ミステリー！ これは、5、ビックリ！

峰岸 4、ビックリだよ

尚人 そうか、4！

続けていりゃモノになったかもしれんぞ

辺見 嫌味はよせよ

尚人 僕も書いてみようかな、ミステリー。ボクが書けたら、ええと、5、ビックリになる！

辺見 (呆れて) 何をバカなこと

峰岸 いや、才能、あるかもしれないぜ

稜子 あるわよ絶対

尚人 (そう) ですかね！

稜子 ねえ彩さん

辺見と彩は目を合わせる

尚人 ではミステリー作家を目指し、僕は今から探偵になります！

稜子 ビックリは終わり？

尚人 おしまいです！

皆、それぞれに苦笑

尚人 (気取って) では皆さん、私の質問に教えてください

彩 尚人さん

尚人 母さん、質問はまだだよ

彩 もう寝なさい、明日、病院、早番でしょう？

峰岸 いやいや面白いじゃないか。皆さん、探偵さんの質問に答えよう

尚人 (みんなを指さし) 真実を教えてください

峰岸は手をあげる

峰岸 真実を答えます

尚人 あ、それいい！ 質問する人は指をさして、答える人は手をあげる！ これでいこう！こうです (峰岸を指さし) 「真実を」

峰岸 (手をあげ) 「真実を」

尚人 (ハイテンションで) いい、いい！

峰岸 よろし、探偵さん、さあ、なんでもこいだ

二人のテンションとは違う他の三人は、それぞれ目を見合わす

尚人 まず、父さんに質問です

辺見 僕か？（皆に）急にくるね

尚人 （辺見を指さし）真実を！

峰岸 （片手をあげ）真実を！だ ほらやれよ

辺見 （苦笑しつつ、手をあげて）真実を

尚人 なぜ、このきちょうくんな幻の一冊が、我が家にあっただんですか？

辺見 それは

峰岸 そりゃボクがやったからさ

尚人 父さんに？

峰岸 いや、お母さんに

尚人 なぜ

峰岸 なぜって、理由などいるかい？

尚人 だって、幻の一冊ですよ

峰岸 たまたま、幻になったただだよ

尚人 たまたま？

峰岸 見本版を刷ったところで印刷屋がドカーンと焼けて（本の一番裏をめくり）ご覧、ここに「見本」と判が押してある

尚人 あ、ほんとだ

峰岸 元の原稿も焼けちゃったから、たまたま、幻の見本版になったワケだ

尚人 えくじゃあ、そんなに特別なものではなかったってコトですか？

峰岸 まあ（苦笑して）そうかもな

尚人 道理で！ だってこれ、納屋でホコリにまみれてましたから

彩 （尚人に）ちよっと

辺見 (尚人に) おい

稜子 まあそれはヒドイわ。彩さん、本当の話？

彩 あの……すみません

稜子 ダメよ！ いくら「たまたま」でも、「見本版」でも、峰岸の大切な一冊に変わりないんですからね、もっと……

峰岸 (制して) まあいいじゃないか。彩ちゃん、僕は構わんよ。まあ、昔の本だしね(おどけて) 編集長、許してやってくれ

……

峰岸 (大げさに) まずいぞ。奥さんの右のほほ、ピクピクしてるだろ、こういうときは本気で怒ってるんだ

稜子 尚人さん、わたし、ら、ビックリ、もらうわ

尚人 お、どうぞ話してください

稜子 峰岸先生はね、その時々が一番好きな女の方に見本版をあげる癖(へき)があるの(峰岸の真似をして)「この世に一冊だけの本を君に」って(笑)そりゃあ、この世に一冊よ、見本版だもの。どう？ ら、ビックリ！

尚人 認定！

稜子 やったわ！ 「ビックリ」もらっちゃった

尚人 (興味津々で) 峰岸さんって、母さんのことそんなに好きだったんですか？

辺見 尚人、そろそろやめろ

尚人 (峰岸を指さし) 真実を！

峰岸 (手を挙げて) 真実を……

皆、峰岸を見る

峰岸 (苦笑して) そりゃ嫌いな女にはやらんさ

稜子 私はもらったことがないわ

峰岸 だって君は最初から話を知ってるだろ、編集してるんだから……

尚人 (稜子を指さし) 真実を!

稜子 (手を挙げて) 真実を!

尚人 母さんはあなたの恋敵だったんですか?

稜子 恋敵?

彩 尚人さん、そんな失礼なこと

尚人 いいじゃないですか、もう何十年も前の話だもの。もう時効でしょ

稜子 恋敵、ねえ

尚人 どうです?

稜子 そんなこと考えてみたこともなかったわ

彩 すみません、本当に

稜子 だって私たち、今の今まで面識がなかったんだもの

尚人 え? だってさっき、一緒に同人誌をとって

ごめんなさい、アレは嘘。同人誌をやったのは(峰岸と辺見と自分を指さし)この三人。(彩を指さし)この人はナシ

皆、彩を見る

尚人 ナシって……え？　じゃあ、母さんは……

峰岸 (稜子に) おい、それくらいにしとけよ (尚人に) 気にするな、酔っ払いの戯言だ

稜子 そうね、恋敵だった……そうね、そうだわ

彩 いいえ、違います

稜子 (彩を見て) 違う？

彩 だって、あなたと私では次元が違いますから

稜子 (鼻で笑って) 次元？

彩 ええ

稜子 ……

彩 (尚人に) 私と一緒にするなんて失礼だわ、本当に

稜子 (制して) 次元って、どの次元よ

彩 あの

稜子の中で何かがブツリと切れる

稜子 ホントに、嫌い。あなたが嫌い

峰岸 奥さん、どうした。いつもの君らしくない。どうどう、どうどう

稜子 (峰岸を振りほどき、彩に) 結果あなたの勝ちなのよ、あなた、わかっている(皆に)この人、わかっているのよ、わかっているあんな風に(真似て)「次元が違います」とかって

彩 あの、私

稜子 峰岸はね、あの頃、あなたのことばかり書いていた。「細き君の手は」あなたに捧げた本なのよ！　なのにあなた読んでないって何？　納屋でホコリまみれって何？　峰岸が必死で書いて

尚人 たのよ、あなたのことを！ 感謝こそすれよ、それを偉そうに「恥ずかしい」ですって？
峰岸 れこそ「ビックリ！」だわ。私は……ただの一行だって書いてもらったことなどないのに
尚人 あの
……え？ 君、僕に書いてほしかったの？
尚人 あのっ

皆、尚人を見る。尚人は本を手にしている

尚人 母さんに捧げたって……「細き君の手は」はカフェの女給が主人公で
稜子 (彩と同時に) だからそうなの！
彩 (稜子と同時に) やめて下さい
稜子 (制して、彩を指さし) だから、この女がその「女給」なの！

少しの間

尚人 (本を持ち) これは、母さんなの？
彩 ……
尚人 ほんとに、母さんのこと……なの？
峰岸 君はその手の女を差別するタチではないだろう？
稜子 あら。尚人さん、ご存じなかったの？
彩 ……あの

彩は尚人に近づこうとするが、尚人は本を叩きつけるように置くと彩を避ける

辺見 (彩に) 君は何も言わなくていい。尚人、あとで話そう

尚人 あとでって何を？ 僕はバカじゃない

辺見 ……

尚人 なるほど、そういうこと……そうか……そうなんだ

稜子 私だったら……ホントにごめんなさい、ほんとに酔っちゃった。やだわ

稜子は笑いだし——彩は本を峰岸の前に置く

峰岸 なに？

彩 お返しします

峰岸 なんで？

彩 さっき、お願いしたでしょ？ これは夢だと思って下さいな

峰岸 ……

彩 だからもう忘れて下さい。そしてどうぞお帰りになって

峰岸 彩ちゃん

峰岸は彩の手をとり、彩はそれを振りほどく

彩 私、車を呼びますわ

彩、出て行くとする

稜子　でも、こんな田舎にタクシーなどいるかしら？　辺見くん。何十年ぶりに会ったというのに泊めても下さらないの？

辺見　……

稜子　もう少し居させてよ。これじゃ全然足りない、次のネタにはネタ？

稜子　そうよ、峰岸は長編を書かなくっちゃいけないの(峰岸に)社長の息子さんから言われたわ。これが最後のチャンスになるかもって

峰岸　……君のどこにも行ったのか？

稜子　あんまり出来が悪かったから、心配になられたのよ

峰岸　……あの、ピース野郎

稜子　峰岸はね、今度こそ「戦火の華」を超えなくちゃいけないの。だからお願い、もう少しここでネタを集めさせてよ

彩　(胸を押えて)……ネタ

稜子　ええ。そうすれば……そうよ！　続編が書けるかもしれない……いえ続々編かしら。きっと峰

岸は書くわ、書いてくれるわ！　ねえ、辺見くん

辺見　尚人、車を探してこい

尚人は動かない。辺見は尚人の身体をつかむ

尚人　……やめて下さい

辺見 何だその態度は？ えええ？ なぜ、行かない

尚人 ……

辺見 お前はこんなことで母さんを否定するのか？ 侮辱するのか？

尚人 ……

辺見 お前は（稜子を見て）こんな女の嘘を信じるのか？

尚人 ……嘘？

辺見 ああ、嘘だ

稜子 やめてよ私は嘘なんてついてない。辺見君、あなた同罪じゃないの。私たちは一蓮托生でしょ！

彩は辺見をみるが、辺見は彩を見られない

尚人 ……同罪って何がですか

稜子 私たち、ちよつと、あなたくらいの歳にね……

辺見 もうやめろ

稜子 ねえ、この際、みんな「傷」を見せちゃいましょうよ。私だけ、恥をかかされて終わりだなんて嫌なもの

彩 違う

少しの間

彩 あなた、何を言ってるの？ 恥をかいたのは私

皆、彩を見る

彩
私が、一人、恥をかかされた

彩、辺見を指さす

彩
真実を

辺見
聞かない方がいい

彩
大丈夫

辺見
……

彩
大丈夫よ私

辺見
……しかし

彩
だって、このままだと、眠れないわ

辺見
……

彩
眠れないと、夢も見られない

辺見
……彩

彩
あなた、何をしたの？

辺見は答えられない——彩、稜子を見るとゆっくらと描けす

彩
真実を

稜子、手をあげる

稜子

真実を

彩

(うなずく)

稜子

辺見さんと私はチームだったのよ。峰岸の才能に惚れ込んだ完璧なチーム

みなそれぞれに反応をする——知っていたもの知らないもの

稜子

(本を持ち) 「細き君の手」これは駄作だった。女給と小説家のよくある恋物語。辺見君と私は焦ったわ。ここで終わらせちゃダメだ。これが峰岸慶次の絶筆ではダメだ。もっともその後世に残るものをもって

峰岸

大袈裟な

稜子

大袈裟よ。今から思えば大袈裟よ。でもあの頃の私たちの「真実」だった。残された時間は少ないと置いていたから。だって、戦争が終わる時は、日本人全員が死ぬ時だと思っていたんだもの。だから、私の頭の中ではいつも時計の針の音がしてた。チクタクチクタク……々

峰岸

……

私と辺見くんは毎晩、話し合った。どうしたらいいんだろう、峰岸に書かすには、どんな刺激を与えたらいいんだろうと

尚人

戦争という大きな刺激があったじゃないですか

稜子

日常だったのよ戦争は。日常からは何も生まれない。特別な何かが必要だった

稜子は本を掲げる

稜子

そして閃いたのよ私。「そうだ、この本の続きを書かせればいいんだわ」って。峰岸が大好きなこの女給をカタワにするか殺すかして、特別な悲劇を生めば、峰岸は絶対に何か書き出すに違いないって……

峰岸

え？

稜子

こんな出来の悪いもの、見本版だって作るのはいやだった。でもこれさえあれば、あなたが（彩を指さし）この人の、あの薄暗い二階の小部屋に訪ねて行くのはわかっていた。だからあの日、辺見くんには、下準備をしてもらったの。あなたよりも先に訪ねて、薬を飲ませるようになって……そう、ワインに混ぜて。女給さん、ワインがお好きだったから

彩は辺見を見るが辺見は彩を見られない。尚人は一人を見ている

稜子

あとは全部、私の、いいえ、私たちの計画通りだったわ（峰岸を見て）あなたが部屋に入った時には「酔っぱらった女」がいた。あとは辺見くんが火をつけて、私が叫べばよかった「焼夷弾の残りが爆発するっ。逃げて逃げてっ」って

峰岸

……

ゼドリンで弱ってるあなたには弛緩した女を運ぶなんて無理だった。案の定、あなたは泣きながら部屋から飛び出してきた……私、ほっとしたわ。だってあなたに死なれたら元も子もないもの。もちろん、いざという時は辺見くんが助けにいく手筈にはなっていたけど

峰岸

……

稜子　で、運のいいコトにその日はちゃんと空襲も始まってくれて……三月の、そうあの東京大空襲

……そうよ、ちょうど今より、25年前

峰岸　……

稜子　私たち思ったわ。これで、女給が一人死んでも、だあれも私たちのせいだとは思わないと。私たちの罪はこれで永久に暴かれなと……ね、辺見くん

辺見　……

彩　そして「戦火の華」が生まれた

稜子　あなた、読みなさいよ、絶対に

彩　読むわ

稜子　（辺見を見て）私、あなたが、私と峰岸から逃げ出したのは「弱気」からかと思っていたけれど……この人を助けていたのねえ。私の計算が狂ったのは、そこだけ

彩は辺見を見る

彩　なぜ、私を助けたの？

辺見　……

彩　ねえ、あなた

辺見　笑ったからだ

彩　え？

辺見　火を付けるとき（稜子をみて）彼女は笑った。嬉しそうに笑ったんだ

彩　……

辺見　それで目がさめた。その瞬間に気が付いた……すまない、狂っていたんだ、狂っていたんだよ、

稜子
あの時、僕たちは
子をはらんだ女を殺すのが怖くなっただけでしょ？

辺見が稜子を殴ろうとしたところを、峰岸がかばい、峰岸は辺見に殴られ、無様に転ぶ

稜子
あなたっ！

峰岸
君は、キチガイだ

稜子
……

峰岸
キチガイだなあ

稜子
そう、私は、キチガイよ

峰岸
いや、いいよ、実におもしろい

峰岸は小さく笑い出す。稜子は峰岸に抱きつき、くぐもった声でうめく

峰岸
バカだな、僕に書いてほしければ、そう言えばよかった

稜子
……

峰岸
いくらでも書いてあげたのに

稜子
……

峰岸
僕はむしろ、君を書いたら叱られると思っていたんだ

尚人は峰岸の前に立つ

尚人 出て行け

峰岸は尚人を見上げる

峰岸 そうだな、帰るよ

峰岸は皆に、頭を下げる

峰岸 いや、ご馳走になった。もう腹一杯だ。ありがとう

峰岸は稜子を支え、去る——家族だけになる

尚人は泣いている

彩、尚人に近づく、尚人ビクリとするが、彩は尚人の身体をつかむ

彩 バカね。何、泣いてるの？

尚人 ……母さん

彩 私たちは家族よ。いろんなことをひとつひとつ積み重ねてきた家族。それは絶対に揺るがないの。誰にも壊させやしない

彩は尚人の顔を両手でやさしく包む

彩 これは、紛れもない「真実」(辺見に)ねえ、お父さん

彩と尚人は辺見を見る。辺見はゆっくりと手を挙げる

辺見 ああ、真実だ

 辺見と彩は目を合わせ、彩は微笑む

彩 それにアしは夢だから

尚人 夢？

彩 酷く嫌な、夢

……

彩 でもね、目が覚めたら、何も覚えてないの

尚人 (小さく) そう

彩 そうよ、いつもの平和な我が家に戻っているわ

 彩は辺見に手を伸ばし、辺見はその手を取ろうとする

 稜子のギャ~~~~~ッという叫び声

マリア(声) こんにちは！

 ——と、血まみれのマリアが入ってくる、手には包丁

マリア

ねえ、聞いてよ、センセイったらね、私の金魚を殺したんだよ。ダメだよ、殺しちゃダメだよ。アタイがね、エサをやりすぎて死んじゃったのもいたけどさ、あれは、ワザとじゃないもん。でもセンセイはねえ、お酒を入れてワザと殺したの。ワザとだよ！許せないッ！だからアタイもセンセイを殺してやったの！ワザと殺してやった！

——暗転

海の音 ※ここで初めて聞こえてくる ※生活音、町の雑踏などもすべて、聞こえてくる

数日後——同じ時刻・別の場所・晴れ時々、曇り

OB・海の近くの医者の子のリビング・30

彩とタミが這いつくばっている。タミの手にはスリッパ

尚人が出勤の用意をして出て来る

尚人 何やってるの？

タミ またやられちゃったんです

尚人 なにを？

タミ 蟻にお砂糖を！

尚人 ありやうや

彩 私がバカしたの。お砂糖のツボ、開けっばなしにしている

タミ ここから、ここまで、真っ黒な蟻の行進だったんですよ（身体をふるわせて）わあ、もう思い出すだけでゾッとする

尚人 (彩に)すごいね

彩 (笑って)すごいの

タミ 笑い事じゃないです!

尚人と彩 ハイッ

辺見が白衣を着てやってくる。手には金魚の工サ

辺見 (尚人に) 気をつけろ、噛まれたら痛いぞ

尚人 そうなんですか?

辺見 ヤツも必死さ(彩に) 君、踏むなよ

彩 ええ

辺見、金魚鉢の金魚に工サをやる

タミ あ、あそこ、あそこから、出て来てるっ

タミ、スリッパをふりふり、部屋から出て行く。辺見と彩、尚人はその様子が可笑しい

○A・東京の作家の書齋・31

文机で稜子が原稿の清書をしていて、その隣では門倉が出来上がった原稿を読んでいる

峰岸
（突然入ってきて）わあああ
やだ、びっくりした
なんですかもう
門倉

峰岸は周りを見回してほんやりとする

稜子
どうなさったの？

峰岸
……夢か

稜子
夢？

峰岸
……夢を、みていた

稜子
へえ、どんな？（原稿用紙をトントンと揃え）終わりました
おっ
門倉

稜子から原稿を受け取る門倉

門倉
（原稿を読む）センセイだったらね、私の金魚を殺したんだよ。ダメだよ、殺しちゃダメだよ。アタイがね、エサをやりすぎて死んじゃったのもいたけどさ、あれは、ワザとじゃないもん。でもセンセイはねえ、お酒を入れてワザと（読むのをやめ）おっ、こりゃいいや（大げさに彼なりに再現してみせる）思わぬ珍客！ 真っ赤な血とドロリとした金魚の死体……（納得して）うん、サイケですよこれは、傑作だ

峰岸
……
見本が出来たら、すぐに持ってきますからね
門倉

稜子 ええ

門倉 じゃあまた

●尚人 じゃあ、行ってきます

●辺見と彩 いってらっしゃい

門倉 最後は？

稜子 ピース

門倉は「そう！」と笑うといそいそと去って行く

●尚人は出て行く

稜子は門倉を送りつつ、ふと、金魚鉢に目をやる

稜子 あら、子供がいなくなっちゃった

●金魚鉢に近づく彩

●彩 すっかり、食べられちゃったわねえ

●辺見 (金魚に) ほら、ご馳走だ

★稜子と彩は金魚鉢をつつく

稜子 でも、また生まれる

●彩 フッフ

「世界の国から、こんにちは」が流れてくる

キャバレーの踊り子の衣装に着替えたマリファ出て来て踊る。尚人は立ち止まってその姿を見る
林田と門倉が出て来て近づき、一緒に見る

クルクルとパラソルを回しながら、咲織が歌いながら出て来る

彩と辺見と稜子は金魚を見ている

峰岸はカリカリと爪を噛みだし、カリカリという音はだんだんと大きくなる

— 終 —

■西瓜糖とは

二〇一二年に結成された演劇集団。文学座の役者、奥山美代子とフクダ&。の役者、山像かおり(脚本家・秋之桜子)が主催する。一二年から一年ごとに「いんげん」「鉄瓶」「じゃのめ」「モデル」「うみ」と新作公演を続け、動員数も増やし、高い評価を受けている。二〇一七年には椿組に協賛し「ドンドンコドドンコ鬼が来た！」で新宿花園神社野外公演を行い、野外公演最高動員数を記録。第六回公演は、二〇一八年四月「レバア」西瓜糖HP <http://suikato.blog.jp/>

■山像かおり(秋之桜子)

大阪府出身。一九八八年より文学座劇団員となり、二〇一七年文学座を退団。フクダ&。所属。文学座公演の他、「羽衣1011」「西瓜糖」の全公演に出演。コメディーから淑女の役まで多彩な表現に評価が高く他劇団、プロデューズ公演への参加も多数。近年では、流山児★事務所、椿組、リリパットアーミーなど。声優としてもジュリア・ロバーツ、ジュリエット・ビノシユの声や、海外ドラマ「ER緊急救命室」「スーパーナチュラル」「プリズン・ブレイク」「クローザー」、アニメ「サマーウォーズ」「妖怪人間ベム」などで主演、メイン作品、多数。

●作家として2005年に青二プロダクションの渡辺美佐と二人芝居「羽衣1011」をたちあげ初めて脚本を書く(この時、皆で秋之桜子と命名)。ドタバタの中にも哀愁ある女二人芝居は評判を得る。2010年に昭和の文士たちをモデルにした作品「猿」にて第十六回劇作家協会新人戯曲賞優秀賞受賞。2012年からは演劇集団「西瓜糖」にて、大正昭和を背景に時代に流される人々を描き、ザラツキのある物語を創作している。他……椿組、花組芝居、劇団昴(2013年シアターグリーンBIG TREE THEATER賞「暗いところで待ち合わせ」の脚色)わらび座(子供ミュージカル)など多くの中小劇団、プロデューズ公演の脚本のほか、劇場アニメ「プリンセスプリキュア パンプリン王国のたからもの」(15年東映)、小説「S!プリンセスプリキュア 花とレフィの冒険」(講談社)など、あらゆるジャンルに作品を提供。日本劇作家協会所属。

■奥山美代子

札幌市出身。1989年、文学座附属演劇研究所入所。鶴山仁演出『グリークス』で初舞台。文学座作品に多数出演。他劇団、プロデュースでは『あうん』『恋文屋一葉』『あの日僕だけが見られなかった夜光虫について』『墮落美人』等。『ヴェニス商人』『ハムレット』などのシェイクスピア作品は8本いずれも主演、メインを務めている。男役も得意。2012年から西瓜糖作品には全作品出演。演技指導者としても、人気講師で演劇養成所や声優養成所で活躍している。

※この脚本の複写・無断使用を禁じます。

脚本使用のお問い合わせ・演出・出演依頼はフクダ&Co.（福田）まで

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2丁目5-3 一ツ橋フォレスター 802

TEL 03-6272-8978

FAX 03-6272-8979

E-mail info@fukuda-and.co